言海原稿

第五号

洋学文庫
文庫8
A 149
11

言海原稿　第五号

大槻文庫

特 仮 199 (11)

名詞ノ下ニ付ケテ其文ノ

い 語ノ伊 意主張ル意ヲ示ス 餘心 動詞ノ連体形ヲ名詞トシテツヅルコ

トモアリ 継体紀二十四年育「毛野ノ後俱吾（若子）伊笛吹キノボル」

万三〇〇〇「志乎（女名）伊ハ麦セ」同四〇〇〇「紀ノ国守伊留ノテム

カ岐 同十二〇〇〇「家ナル妹伊イブカシミセム」万七〇〇〇「花待伊間ニ」同

十九〇〇〇「乱レ又伊間ニ」

いせーをのあま「伊勢海人」を、語源詳ナラズ、取解ナリトモ、二説アリ」

伊勢ノ海ノ海人、後撰ニ、遊三「鈴鹿山ゾせをゝあまノステ衣ヒホナレケリト」

人ヤ見ルラム」千載ニ、遊二「シホたれ、ゾせをあまや我レナラム サラバミルメヲ

カル由モガナ」

いせをのみや「伊勢宮」伊勢ノ大神宮。夫木、三十四「月影モ絶ズヤ澄

マム鈴鹿川いせをみ宮ノ世々ノ古道」

森むらや製

いち里（三）二里（八五路）義、萬葉集「八十衢」ト三ヘルガ如シ（傳）訓前

（二）四方ヨリ人ノ多ク集ル地。都又ハ市街ノ地。

古事記下（雄略）三十八「海ノ此ノ多集知（トヨ）ト高ル伊知ノ」

雄略紀前紀「海柘榴市ノ巷ニ歌場ヲ設ケテ」

柘榴市ノ八十衢「市」ハ京都ノ市街ニ始ムル意ナリ

（三）市街ノ一處ニ人ノ集リテ物ヲ交易スル所。又其ノ處ニ一定ノ日時ニ定メテ

行フ市ヲ立ル。市ニ立つトモ義注後宮抄、三代實録「設文云、市、賣買

所也、以知」ト云ヘリ。「四ツ市ニ出デ、目ナレズ買ヘリシ絹」

高擬カキ」（平城ノ西京ノ市）

市ヲ成ス（人多集ル所撰六帖六「世ニシアラバ行カヤ人モイカガカリ者」）

問ヒ、ちヲナサマシ」。。。「門前成市」

[illegible]

（三）本編ノ編入ノ時代

[illegible]

（一）[illegible]

[illegible]

祖代紀下ノ一「天穂日命是神之俳也」（古訓）

いさを　渠真熊　鬼魁（イサヲ）（剛勇義也）長トシテ撞者。

是行紀十年十月、夏虔文、迮虔文「是両人勇敢之渠帥者也」衆乱

甚多」持統紀即位前紀「美濃軍将等奬大後弥高共誅大友

皇子」「大隅隼人多数ニ来朝」

竟宴歌「天穂日命「草木皆言止メシトテ荒ぶる国（立チニ英装鳴

ナリケリ」

いさをし　有功（イサヲシ）（渠真豪ヲ活用セルモノ、大人し、真し、列）

[illegible]　雄々シク勇ミ、務メタリ、出精ナリ、垂仁紀、三十二年七月「天皇

賞ニ野見宿禰之功」敏達紀元年五月「董卒辰爾」孝徳即位前

紀「至忠之誠」白雉二年二月「百姓清正強勇者」天武紀上十八「有功之熟者」

類聚國史ニハ延暦十一年十月記「伊佐平之久」延喜式見宴歌「伊佐良
志久」正字通ノオムカシサ」

いさをし（名）功（形容詞）いさをしノ終止形ヲ名詞ニ用ヰル語、古事記下（允恭）
二十「宇流波斯（可愛女）トサ寝ヲサネテバ清し（生絹）明し（燈）ナドヨミ」
口惜し（手）

甲 イサヲシキコト、事ヲ遂ゲテ善ク成リタルコト、デカラ、功名、

神代紀上ノ三十九「稱五十猛命爲功者」四季物語「君ト臣トノオキテ
ニテ父母ノいさをし著クシテ」

いせ 伊勢（寄せ）ノ轉カトカ（倭訓栞前篇）よし（好）ナド轉ズ」

衣ノ縫ヒヤウニヨリ高サ二寸巾一方ノ長サガ一方ノ緊ヨリ縫メテ縫
ヒメタルスルヨリ 合類節用（元禄）「類、縫衣所謂」

いそ（名）磯（石ノ多シ）名ト通ズ（あしそあそ）相模國風土記「鎌倉郡見
越崎ニ有リ速浪ノ崩名人名踊ニ似タリ布利謂振石也」（萬葉代
匠記）神武紀三十「登ニ河中石上而投釣」增歌「石激水曰磯」磯字
ハ記ニハ磯ト書ケリ誤リ

播磨ノ伊川ノ崎ノ石ノ上ニ香青ノ玉藻沖津藻
（三）スガドルコト、イサルコト。今昔二十九「濱ニ出テ、磯ヲシケル」（貝拾ヒヤリ）

類聚國史ニハ延暦十一年十月詔「伊佐平立久」延喜式「伊佐表」
老久正幸道ノオムカシサ」

いさをし（名）功（形容詞）「終形」
二十「宇流波斯（可愛女）トサ寝ヲサネテバ」清し（生絹）明し（燈）ナドヨミ
Ⓗ イサヲシキコト、事ヲ遂ゲテ善ク成リタルコト、デガラ、功名、
口惜し事
神代紀上ノ三十九「稱五十猛命爲有功之神」四季物語「君ト医トノオキテ
ニ心ヲ父母ノ、さをし著クレテ」

いせう 他下一（寄せる）醸カト云フ（後訓栞、前篇）よ、ゝ（好）ナド轉ズ
衣ノ縫ヒヤウニ云フ意同ニ布帛ノ一方ノ長キヲ一方ノ緊ニ寄セ縫メテ行
ヒ合ハスルナリ 合類第用（元禄）「類、縫衣所謂」
「磯（イシ）ト通ズ」和名抄「岸、世名ハ、ヒ、ハ、ヒ、ハ、ヒ、

いそ 磯（水辺ノ近キ所ヲ総ベテ磯ト云フ語カ）

（カンムリ）冠ノ額際ニ黄ノトコロノ名。類聚名物考一「磯ノ冠ノ縁より」

いたづらゴ（徒）（徒雨）（イタヅラ）稲空ノ約（ムダ）（ムダ）（ムダ）

いなーさく 「稲作」田ニ稲ヲ植エ作ルコト。「稲作」（畑作ニ對ス）

いなもの 異物 異ナルモノ、常ニ異ナルモノ。オツナモノ。「縁ハいなもの味ナモノ」

いなーさと 「異言」いなものヲ見ヨ

いなーさと 「異事」いなものヲ見ヨ

同じ「いなさとヲ言フ」

ソマ ちくし ヲ 「一磔手」 天竺ノ尺度名 「一張手」義ナル ノ譯語ト云フ

「磔」ヲ種々ノ字ニ作ル。天竺ノ尺度ノ種諸說一區々ナレドモ

唐韻「磔、張也開也」ト云フ。手ノ拇手ト中指トヲ張リ

元長サト云フ。又「拃」（唐韻ニ「磔、張也開也」）扶桑畧記、三「三

尊供具於一拃手半」平家、廿三ノ九條「一磔手半ノ弥陀三尊」

我ガ國上古ノ尺度ニ、ナガ（常ニ尺ノ字ヲ當ツレド遠フト云フナルモ是ナルベシ）字類抄「擇、併長ハル」

いなび 他四 「辞」（否ヲ活用ス）

（一）不ト云フ。イナムヒヤヘンセズ。承知セズ。久秦紀、元年十月、「群臣之請事理灼然、何遂謝耶」名義抄、雜部「辞、イナブ」

（三）辞退ス。コトワル。續紀、廿二、天平寶字三年二月「進ムヲ知ラズ、退クヲ知ラズト伊奈備マヲス」撰集抄、八「道ニ入ル事侍ルトキ、いなぶ心アル（カシ）」

いなび 他上二 「辞」前條ノ活用ニ同ジ。イナル。神武紀、「獲梁於天事無所辞」述仙宗「不敢推辞、定為醜拙」

いなのみ 「稲實」稲ノ實。大嘗祭ニ用ヰル、稲實ヲ納ル、所ヲ稲實ト云ヒ、コレヲ守ル者ヲ稲實公ト云フ

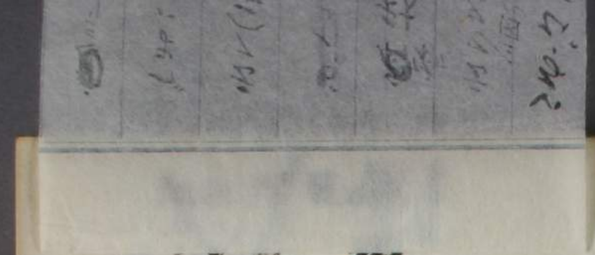
レニ関スルトキハ稲實ト部ト云ヒ、コレヲ守ル者ヲ稲實公ト云フ

大嘗祭式「稲實屋」「稲實ト部」「稲實公」

いなのめの（秋）（あくこがれ、いねむしたゞ、ねむしたり（寝姿）
穂ノ例）（三）明ク、枕詞　万十ノ廿七「相見マク、用飽足ラネドモ稲目明ク
エキニケリ　舟出セム妹」轉ジテ名詞トモ、夜明、アカツキ、シノメ。
夫木、廿、橋「いなのめノ岩ノ懸橋、ナゾ、シバシヤスラヘ、マホナラズトモ」
いなばきむしろ　稲掃帚（拔キ去ル稲穂ヲ掃キ寄セル田ノ帚ノ意ナル）稲穀ヲ
（拔ク前ノ）菅ノ帚ノ麁ナルモノナル、筑紫城址「いなばき竹」宣悟記（本願寺蓮如ノ子
兼俊）「御堂ノ大庭ニ、いなばきヲ縋ニテ將ギテ縋ノ庭ニ敷ケル候」甲陽
軍鑑十九、信玄墓誌「道六間廣ク両方ニ虎落（モガリ）（頑鼠漫筆五）
いなづまびし　「稲妻萎、いなづまノ條ヲ見ヨ」（ヲ結ビいなばきヲ敷キ今。）

いかづちのひかり　「雷光」雷鳴（雷ニ伴ヒテ）
（相）潮ジテ、いなびかり、いなづまトモ其條ヲ見ヨ　伊勢名歌「伊加豆知乃比
加利ノ如キ我ノ身ハ」
いなびかり（冬）「稲光」（稲光、稲魂トモ、田ノ稲、此光ニ因テ實ル
云フ名ナリ）稲妻、稲交接ト云ヒ、稲、穂ヲ孕ムト云フ意ノ名
秋ノ晴夜ニ遠ノ空中ニ忽チ發シ忽チ消ル光。秋イナビ、イナ光
ビ、イナヅマ。熱日キノ強ク空中ノ京築ニ會ヒテ電氣ヲ發スルモノ
云フ（雷ニ伴フニアラズ）又、イナヅマ、イナツルビ。イナタマ。熱閃　いなびかり、ゴロ
ロ、ピカ、ゴロ、ピカ、ゴロ、ピカ、ゴ

いなのめの（秋）（寝の目の秋）あくこさん・ねむしたこ・ねむしたの（寝姿）
ねむしたの（寝姿）ねのほ・こるのほ（稲
穂ノ例）（三）明くノ枕詞 万十ノ廿七「相見マク、用飽足ネドモ稲目明ケ
エキニケリ」舟出セム妹」轉ジテ名詞トモ、夜明、アカツキ、シノメ。
夫木、廿、橋「いなのめノ岩ノ懸橋ホノボノト、ヒハシヤスラヘ、マホナラズトモ」
いなばきむしろ（稲掃席）（扱キ丸稲穂ヲ掃キ寄セル田ノ席）稲敷ヲ
（菅ノ席ノ麁ナルモノ十ヲ、筵城ノ「いなばきむしろ」宣恒ノ（本歌寸蓮如ノ子
兼俊）「御堂ノ大庭ニいなばきヲ縋ミテ敷キ侯」甲陽
軍鑑十九、信玄墓述「道ヲ間廣ク西方ニ荒ナ（頃流漫筆五）
いなばきむしろ（稲敷ヲ結ヒ、いなばきヲ敷キ」



いかづちの（雷光）（雷鳴）（雷ニ伴ヒテ）
（相）（雷中ニ）（雷光）（雷）（常ニ）
温ゴテ、いかづちの、いかづちヲ其條ヲ見ヨ 佛足石歌「伊加豆知乃比
加利ノ如キ身ヲ」
いかづちの（稲光）（稲妻）（稲田ニ見ル雷ニ因ル名）（初秋ノ晴夜
ニ遠ク雲間ノ光ヲ指ス、空中ノ光ヲ指ス、空中ノ光ヲ指ス）
（雷ノ音）（雷鳴）（熱ノ閃ク光）（空中ニ出ル光ヲ指ス）稲穂
（稲穂ノ如キ形ノ雷ノ光）（稲穂ノ如キ形ノ雷ノ光）三語常
（稲穂ノ如キ形ノ雷ノ光）
光勝（豆状ノ如キ流星）侍名抄二ノ十「霊異、伊奈比加利、伊奈一豆流
比、伊奈豆萬」名義抄「電、イナタマ」△次頁

古今ナ要。「秋ノ田穂ノ上ヲ照テ稲妻ノ光ノ間ニモ我レヤ忘ル、」

六帖「いなづま」「稲妻ハ陽炎ハリアリシ時秋ノタヾニ知リニケリ」

（稲妻接義ニ「ひかり」ト「ひかり」ハ同ジ）

いなづま（名）「いなびかり」同ジ（三）模様ノ名、稲妻ノ光ノ

（稲妻ノ模様ヲ見ヨ）

いなづび（名）「稲妻」同（二）いなびかりニ同ジ（三）模様ノ名、稲妻ノ光ノ

屈折シテ見エルニ因テ其象ヲ圖スルハ渦巻ヲ方形ニシタルヲモノ雷文

方形ナルヲ菱形ニシタルモノ稲妻菱トモ（三）折釘ノ一種、光ノ上ヘ方ニ曲ル方

形ニ屈折シタルモノ、床間ノ天井ニ上リ垂ルヽヤウニ折付ケテ掛物ノ紐ヲカク

いなりまち「稲荷町」（演劇）稲荷ノ神ヲ勧請シテアル其隣ノ御屋

ニ居ルヨリノ名」芝居ノ役者「新開中ト稱スル下廻リノ役者ノ居ル所、

又其役者、劇場新話「稲荷町ハ囃子所ハ楽屋ノ両側ニアリ稲荷ノ名ノ

居ル役者ヲおしたのわかしめ（下若衆）トモフ

えむ・っや製

いなほせどり「稲負鳥」（稲刈ヲ課スル（催促）鳥ノ意ナリ）

（稲課鳥ノ義）

黄鶺鴒ノ古名、此鳥、秋ノ末稲ノ熟セシ頃、晝夜、空中ニ我ト鳴キ

ツヽリ田ノ面ニ群リ来ル農民コレニ促サレテ稲ヲ刈取ルナリ

倭名抄十八ノ十五「稲負鳥、以奈布保世度里」古今、四、秋上「我カ門ニ

稲なほせ鳥ノ鳴クナヘニ今朝吹ク風ニ雁ハ来ニケリ」平兼盛集、九月

田刈ル所ニ羽アリ「カラクレテ急ギ刈リツル山田カナ、なほせどりノウシロメ

タサニ」（鶺鴒ノ稲刈ヲ促スガ心ヤリナレバ急ギ刈リ終ル（刈ト意）和

泉式部集「雲ノコトヲいなほせ鳥ノ教ヘズバ人ハ恋路ニ惑ハザラマ

シ」（とぐきをし（どり）條ニ見ヨ）

いなぎ（三）「稲城」事急ナル時、稲ヲ俵ナガラ積ミカサネテ城ニ築キ敵ヲ防グモノ。垂仁紀ニ「狭穂彦、叛ニ積稲作城其堅不可破」此謂稲城也。雄略紀ニ「根使主逃匿至於日根造稲城而待戦」崇峻紀ニ「物部守屋大連、親率子弟、興軍築稲城而戦」

（三）△特ニシテ、田舎ノ永久四年百首ニ「いましきや民ノ暇ナク路ヲセニ尽キセズ運ブ貢物カナ」八雲抄ニ「いましきいねぬかり」ト見エ、塩尻、五十三「いましき田舎ヲ云フ稲敷也」

い盛「唯」いい（唯）ヲ見ヨ

いなくさ「稲草」稲ノ生ル雑草。名義抄「稂イナクサアラビボ」

いなぐら「稲倉」刈リタル稲ヲ納メ置ク倉、ヨナゲラ、ヨメゲラ、廩 倉 侍名抄、十ノ十三「廩 伊奈久良」

いなしき「稲敷」（三）其ノ地敷キテ座トスルヨト。堀河百首、雑「いましきヤ伏屋ニ見レバ庭モセニ門田ノ稲ハ刈リ敷トシテケリ」△（せ（諸）ノ條ヲ見ヨ）

いなせ「諸吾」（せ、然ノ誤、オボレ、おぼれ、おぼれ（溺）やぼせ、やぼれ）流稲用ニ竹取「大伴大納言ハ、就ノ歌ノ玉取リテオハシタル」いなさモアラズ」

イナ「否」ト諾ヒ「イナヲ、イヤオシ、後撰ノ恋五「親守リケル女ヲ、いなトモセトモ言ヒハナテト申シケレバ「いなトモセトモハナテトモ申シケレバ」（今後ニカケタルカ）

△詩經小雅 「稽」？

世ヨリ」（古ハ諾ト直ズ古（諾ノ條ヲ見ヨ）

いなを（名ニ否諾）否イナト諾ウベナト、承知ト拒ミルト、

一カ月ノ十七「相見テハ千歳ヤ往ヌル否（イナ）乎カモ我ヤ思ヒ君待チガテニ」

百十四三「筑波根ニ雪カモ降ラル伊奈（イナ）乎カモ愛シキ子等カ布乾サルカモ」

万十六ノ九「否モ諾モ欲リ花マニ赦スベキ」

いなせる 動 いなせ（往）ノ口語

いなたばり 稲束（稲手張ノ義）握ニ盈ツル束（秀束ヲ握ニ盈ツル束）ト云フ」稲束（ツツ）ヲ束ネテ握ニ盈ツル束

箋注倭名抄九ノ廿「束（以奈太波利）束世稽、刈把（把数ヲ）」△

いなつび 稲粒（稲粒ノ義）稲ノ実ノ粒、イナツブ、コメツブ。

倭名抄七ノ「粒、伊奈豆比」倭玉篇「粒、イナツブ、コメツブ」

いなつぶ 粒 前條ニ同ジ

いなむ 他四 辞（いなむノ轉）

（イナブ）肯ハズ。承知セズ、竹取「親ノ宣フコトヲ肯ハズ、いなみ申サムコトノイト

ナンサニ」

（三）辞退ス。著「副集九」「勅定アリケレバ、いなみ申スベキ事ナクテ」

いなむ 他上二 辞 前條ノ語ニ同ジ。イナブル。続

いなや 感 否 （前條ノ語ノ轉）タイニスナハチ。則「手紙ヲ見ヤいなや引

列表」

いなづまがに 稲妻蟹（イナヅマ）整（アゲオロシ）ヲ上下スルヲ表ト見タル名、伊豫ニテ米春蟹ト云フ

（又イネツキガニ）

蟹ノ一種、形ハ蟹ニ似テ甲整ハ潰渠中ニ接メバ今デトロガニト云フ

蟹蟹

其條ヲ見ヨ。倭名抄十九ノ八「蟹蟹海清稲春蟹之類也」名義抄「蟹

蝶イヲ「ヒギカニ」神楽歌、篠波、葦原田ノ、葦川支加仁ヤ、巳レサヘ（娘ヲ新婦ニ）
浮ズトテ、捧ゲテハ下レ、下レテハ、捧ゲヤ肘（カヒナケ）ヲスルヤ」（新婦ヲ招ク意ニ云）

（リ）

（寝ル目ニ、ラヌめ）

いもーむしろ（秘）「（寝屋）（筵）（いねむしろ、轉）川あめ（ラヌめ）ラヌ目ノ例、夫婦寝
ルニ用ヰル二枚刺レシキ丸筵（ひとぐさ）因ヲ敷くニカリ二枚刺シ然スヨリカは
ニヘカール（稜威言別）」敷く、文河ノ枕詞

一ノ土ノサ六「ヌボコノ道行キ殺シ伊奈武思倍敷ヲテモ君ヲ見ム由モガモ」
顕宗即位前紀、伊儀武斯盧川傍柳」万八ノ三十二「伊奈武ヲ之呂、河ニ
向キ三ケ」

（三）犬ハ、ものゝけ、ヲ追フトテ、幼児ノ額ニ、犬字ヲ書クトアリ、小児傍ニ

△故有ニ皇帯、紀伊石棺出
雲石棺等
（竹内文書）ニ名
云々革帯是
其徳名也」

いしのーむび「石帯」（背ニ名ヲツケレバ名トス）束帯ノ用ノ帯。二重マハリテ胴綿ノ如ク革ニテ作リテ黒漆塗リ故ニ革帯ノ名モアリ左端ニ鈕具アリ右端ニ数孔アリ人ノ肥瘠ニ因テ伸縮シ其餘ヲ腰後ニ挟ミオク、前面ハ袍ニ隠ルヒハ後ニ背部ノミナレトモ（但シ後ニ）

一名、腰帯、

端ニ別ニ革ヲ作リ添ヘテ背ニ（革帯）背部ニ玉ノ名ヲ置キ白絹ヲ以テ覆ヒ必ス疑トス玉ハ玉ノ帯ト云フ玉ハ方丸鞆ノ別アリ二枚到ル所ヲ以テ

後名抄十二ノ三十「唐衣服令云革帯玉鈴ハ位階ニ因リテ所ノ金玉石角等ヲ以テ」

扶桑略記ノ「愛雲四年二月「天下始用革帯」空穂ノ「蟬鈴ノ匣ニ云々聞テ見タヘバ自信ニムノいしのあびイトカシテキヤリ」名目抄「玉ノ帯」

降雀ノ上ニ三位已上用之」

次ハ（三）ヲ（三）ニ修正

（三）犬ハものゝけヲ退ケ魔ヲ避クトテ幼児ノ額ニ犬字ヲ書クコトアリ、小児ノ傍ニ犬箱犬張子ヲ置キ小児ノねむられぬ時、ねむれ、ねむれ、ト呪スルコトアルモ是レナリ大府記（為房卿）康和五年八月廿七日「東宮遷御高松第云々宇佐御願奉書ニ犬字」（年山紀聞ノ）蒐玖波集（文和）「犬ヨリ人ノ字ナリケレ」緑子ノ額ニ書ケル文字ヲ見ヨ」小笠原傳書「宿直ノ犬（犬箱）ナキ方ハ難ニ犬ノ字ヲ逆書ニスルセ」（松屋筆記、百十五）

いぬ・ふせぎ　犬衛　犬伏き柵、多クハ堂内ノ内陣ト外陣ト間ノ結界ヲ据エオク物ニアリ

長谷寺縁起柵、枕草子ニ長谷寺「犬ふせぎ」内ヲ見入タルコトイミジク尊クテ、犬ふせぎニ竹簾ヲサラレトカクル世ニ、更級日記、清水寺「御帳ノ方ニぬ坊？」

ふせぎノ内ニ青キ織物ノ表ヲ青テ表ニ使ハレタ」「明月記、寛喜三年、八月十九日「犬ノ堂ニ、仏壇ニ犬衛ニ四天福二年、八月廿三「御墓上置石塔ニ犬衛ニ」

ぬ・ぼねより　犬骨折　犬ノ條ヲ見ヨ

ギヤキヤキヤリ。益キヤ、ネヤリ。ムダボネヤリ、ボネカリソン　徒労　「犬骨折ニ骨ニ取ル」

犬骨折テ骨ニ取ル　狩ニ出ツ功ヲ他ニ奪ル

いぬ・のこぎり　犬挽臼　犬伏雪ニ降ヘバ喜ビ霧ル」雪ノ異名、

天明ノ川柳「犬ヲ代ル　伯母ヲ萬代御献上」（加賀前田家ヨリ毎年二月朝日ニ雪ヲ幕府ヘ献シタリ）

いぬ・ちどり　犬蓼　古名、ハマタカナ、アシナヅナ、ハマゼリ　今又スベリヒユ

小草、草野向陽ノ地ニ多ク、葉ハよめなニ似テ短ク厚ク色深クシテモアリ、地ニ就キテ叢生シ春、芽ヲ抽クモ四五月ヨリ次ニ発上ハ緑ニシテ下ハ紫ナリ其葉互生シ茎頂ニ△

いぬ・まき　犬槙　古名、披（マキ）。（今又、犬槙）　△ちさまき　各條ヲ見ヨ

△長ノ穂ヲ成シ二回花ヲ四月ニ開キテ花ニ異ナラズ　但、色黄ナリ　茨ヲ結ブ初夏ニ熟キテ寒ナル時ハ少シ赤ク茶褐色ナリ　萬葉

いぬ・のふし（名）　いんのふし　各條ヲ見ヨ

いぬ・つか　稲束　いなだばり　東ノ條ヲ見ヨ

いねつむ（恵）稲積（治用セザル見ズ 滑稽雑談（正徳）「寝所ト
尋常ノ如ク唱フレハ病床ナドニ紛ラシレバカケ言ナリ」）
寝ぬ 寝ら 寝る 正月ノ忌詞、起ク 稲搴ぐ（モ同ジ）ト言フテ俳諧ニテ歩年
ノ事ヲ詞トシ 初春ノ季トス 昔ノ貢船ニ米俵ノミ積ミタルヲ図セルア
リ 那ナ稲積ト枕ニ敷キテ寝テ初夢ヲ占ヒトナリ
いねつきごがに 稲舂蟹 いねきごがにヲ集
いーねう 遺孕 イヒタル、ヨツバリ、ネセヒヘン
いねのーまる 稲丸 紋所ノ名、稲ノ葉ト穂トヲ圓ク輪トシテ図キタルモノ

いにーさき（ゴ）往時（往前ノ義）マヘカタ。以前。音便ニイレサキ。
雄略紀 伊前紀「淡路島ヲ以テ菅生ノ三輪身狭
評明紀 伊前紀「吾曾特枕ニ叔父之病」
いにふ 移入 ものヲ（輸出）ヲ基キ
いにしへーびと 古人（ルナビ） 舊知 故舊 万十ノ廿三「眉根掻キ心イ
ブカシミ思ヒ出ル去家人ヲ相見ツルカモ」謡曲 蘆川「唯今ノ蘆ニ宴ル人ハ
昔ノ人ガいにしへびとニテ候フ」（日往時ノ夫）舊夫 主曲緒ヲ解ク猴ニ
日清桐壺ノ主「父大納言ハ十年ノ内ニ世北ノ方ナムハ
いねーが

いぬ・かざや　犬笠懸　犬追物ト笠懸ト、いぬおうの門墓

いぬ・なぶり　犬愛　教誨セズ徒ニ愛ガルノ。

いぬ・ゆき　犬行　いぬばしりヲ見ヨ

いぬ・ばしり　犬走　(一)古ハ、ゆるぎ、築地ノ外(構外)溝ト、間ノ狭キ空地
左京職式「大路廣十丈、自垣井至溝辺八尺」註「垣、基也、犬行五尺」
保元二ノ二

新六帖信實「崩レソフ破レ築地ノ犬ばしり踊々所キヤキ我身カナ」

(二)城ノ垣ト堀トノ間ナルニモ云フ　築城記(永祿)「土居ノ屏ヨリ内ハ武者ばしりト云フ外ハ犬ばしりト云フ」　(三)江戸大傳馬町ノ道幅ハ間、左右溝アリ溝ヨリ内一間ヲ犬走ト称シコレニ沈ヲカケテ往来ニ使ス雨雪ニ傘ヲ用ヒザリキ。

いぬ・ぐし　犬梨　やまなしヲ見ヨ

いぬ・づきたいまろ　稲附太郎　稲附ヲ見ヨ　(名)ハ稲附ヨリ出ル語原ヲ見ヨ

いぬ・ぬすびと　稲盗人　稲ヲ見ヨ

いぬ・ぬり　稲搗　きりぎりすノ異名ナンベシ

いぬ・ぬり　稲春　俳名抄十九「冬蜘蛛　蛇蝎春　一名螢蟲蟋蟀」

いぬ・ぬり　稲舂　稲ノヨウ臼杵ニ搗キ精ゲテ米トスルヲ、コメツキ。　舂米

いぬ・ぬ・ぬた　稲荷歌　大菅金ニ用ヒラル、稲ヲ養キシタル時ニウタフ歌。

犬花日蔭夢「悠紀ノ方ノ稲ぬきうた」

いぬ・ぬ・ぬ・ぬ　犬神人　犬ノ條見ヨ　京都(建仁寺門前特)清水坂ニ住ム種ノ賤民。同ジク祇園祭ノ神輿ニ甲冑ニテ先駆ス義経時代ニ武装ニテ鞍馬ノ死屍ヲ片付ケ神輿ニ従フモ前記ノ不潔物ヲ取除ク役ナルノ遠ヨリシテ禁裏ニ鳥獣ノ斃死アルトキ

コレヲ收ル也入ル 沿革ノ死屍ヲモ收ル 清水寺ノ七星神ノ祭ニモ用ヒラル、東西本願
寺併先寺ノ門主ノ葬儀ニ葬器ノ役ヲ勤ル、一名、弓ぬき、
太平記、廿四第三條、山門嗷訴ノ詞「[illegible]遠流薩摩法師」而於天
満寺、以犬神人可令破却之由可奏聞公家」後愚昧記、應安四年閏
四月「佐川下人死人等ノ取者取棄之取衣裳之間犬神人等称可管領
之旨」

いぬびと 「狗人」 穢人ノ異称 [illegible] 神代紀ノ下ニ彦火火出
見尊ノ兄、火酢芹命ノ罪ヲ謝シテ五ガ子孫常ニ[illegible]リ汝ガ狗人タラム」ト其
苗裔ノ穢人[illegible]等「至今不離天皇宮播之傍代吠犬而事者也」ト
アリ 犬ニ代リテ吠エテ守護スル意ナリ 穢人ハ遠キ行幸ニ隨ヒ國界及ビ山川道

森むつや製

路ノ両三丈ノ葦ヲ苅、元旦、正位大昔金ニ白赤木綿丹礼ノ鬱ガ着テ儀ニ列
シ聲ヲ揚ク 天吹ト云フ 後ニ大昔金ノミトナリ(穢人司式、大昔金式)日本紀口決「大昔
金日、群臣始入宮中時穢人発聲云、狗吠、神代遺
風也」

いぬぼえ 「犬吠」 いぬびと俳諧見コ

いぬのいちばん 「[illegible]番」 以物一番歩ヨリ云フ(三)物車ノ第一、一番先、
いぬのさし 「射遣」 二月十七日 射礼ノ時、不參セシ四衛府ノ者ニ翌日射ヲ
行ハシメ遣スコト 江家次第、三、射礼「外記著藏人所令奏有射遣者」
公事根源、上、二月、射礼「射礼ノアル日ハ、射遣トテアリ、ソハ昨日射
礼ニ參ゼザル四府ニ今日射サセルガ故ニ射ノ二字トハ申スナリ」名目抄「射遣」

いのざい 痙、ぬさ ヲ事

いのーじ 【以宝】 紙所ノ名、藤内ニ平假名ノいくさヲ書サルモノ

いのちーからがら(副) 【いからハ ニヲ ク シテナリ】 命バカリ助カリテ、「持物ハ皆取ラレ、いのちカラ」

逃ゲテ」

命ビロヒテ。

いのーかい 貝ノ貝ノ。

いのちーながし 形一 【壽】 【命長シ、義】 長イキナリ、長命ナリ

皇紀 十三年 「無病而壽」 名義抄、雜部、壽、イキナガシ」

いのちーみやづか 【命冥加】 神佛ノ惠カニテ死ヲ免カレタル。

いのちーくらべ 【命比】 何レガ長生スルヤト競フ、夫木三十六、「鶴屋ノいのちくらべ

ノ勝ケ負ケヲ君コソ知ラン萬代ヲ經テ」

いのちーかぎり 命限 命數ノ運命 島津貴久(愛長)「天命ナリ」

いのんど 【時蘿】 (詳ナラズ、外来語ナル(ヒ)) 草ノ名、茎直ニシテ二三尺許、花葉、

共ニ茴香ニ似テ香氣アリ、花ハ夏咲キテ黄ナリ、實ハ小サクシテ扁平ニ両側ニ狹キ翅

アリ、微黒色ナリ、油ヲ取リ芳用トス

いは 【家】 (家ノ轉、方言ノ訛ル、東歌ニ粗ラヲ福島波里トモアリ)

家ノ東詞、方言ノ三十九、「草枕旅行ク夫ガ丸寝セバ伊波ナン吾ハ紐解

カズ寝ム」 (巻ノ四十、「伊波呂ニ草ヲ結ビテ」 (共ニ武蔵国人ノ

歌ナリ)

いはう 醫方 医術ノ方法

いはがき　岩垣（岩圍ノ約ナル）

岩石ノ周圍ニタル池沼又ハ淵。万十一ノ一「青山ノ石垣ノ水隱ニ同ジ

「岩垣淵」ー「水」ー「清水」

いはがくり　自四「磐隱」（石城ニ隱レ蔭ル意）

ノ名ハ三ツ隱ズ共。莫思ヒソ君カ夫ノ

敬語ニ添ヘられたまふ意

ミマカル。美保崎。鉏火祭祝ノ伊弉冉尊、火神ヲ生ミ給ヒテ「美保止焼

石隱リマシテ」万二ノ三十三、高市皇子殯宮ノ歌「真神ノ原ニ立ち神サブト磐隱

リマス」後姫命世記、後姫命「自退尾上峯石隱リマシテ」

いはがくれ　岩隱。岩ノ蔭。源若紫ノ「いかなれば昔ノ上も荒ニ居テ

土枕マホれ」

森むらや製

いはかせ　醫博士　典藥寮ニ官、諸藥方、脈經ヲ学ビ、咒術ヲ行ヒ醫生等

教授ス又醫博士ニテ

教明紀十四年。「醫博士」

いはき　石城（柳ノ條ヲ見ヨ）　磐城ノ柳、豐内指ヲ載ムルタメニ土

中ニ上下、四方、石ヲ以テ築キタル宮屋、又ハ石城、石柳

常陸國風土記　多珂郡　茨城山、石屋「コヤタベ小泊瀬山ノ伊波帰

茨ニテ敷ニナム　茨ヒソ君ヒ妹」ノ歌ニ「常ニアラバト泊清山ノ石城ニ

隱ズ俱ニ莫思ヒ吾カ夫」同ノ三十三、「常屋ニ立ち墓」「タベ」ニ通ジ

辺近ク磐構ヘ作レル家ヲ」天智紀六年二月、小市國上陵「不記石柳

之役」　姓氏録左京神別「石作連、石作ノ後

いはく　醫但（設文、但「長也」）醫者ノ雅稱

いはく（名）【曰】イハヒワケ、仔細。事由「ほくノアル事」
（副詞ノはく（曰）ノ項）

くはくえ【岩山崩】岩、（宝水ノタメニ）山崩ユルヽ、
万十四ノ六「鎌倉ノ美胡之ノ崎ノ伊波久敝ノ君ガ久由（悔）ベキ心ヽ持タジ」山崩ヲ
悔ノ岸トヨタリ相撲屋（宝三記「鎌倉郡見越崎毎ニ有連浪山崩
不」（菅葉代匠記）

いはくみ【岩組】岩石ノ組合。岩座石ナドニ云フ

いはくさ【岩草】ひとばノ古名イハノカハ。
本草和名、上ハ「石葉、以波久佐」

森むらや製

△私記、磐境、以巳佐加

【箋疏、磐境謂ニ北城一漢如走注、北謂為壇ニ磐城一】

いはさか【磐境】（齋境ニ清マハシル）（齋境義（境ハ條ノ見ヨ）神境ノ意、八雲御抄、
四ニ「大嘗会ニ、ヨロヅノ斧ハ斧トアルハ齋鍬ヨリ齋斧、齋戸モアリ
名ノ船座、船ハ船ニトアルニ比シ齋ハ齋鍬ヨリ」
神竹離ノ樹テル神宝鎮座ノ地。磐座。神代紀、下ノ十四「高皇産
霊尊、因勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境奉齋矣」
大三輪神ニ社鎮座次第「少彦名命来臨、吾ガ辺津磐坐ニ、ヨロヅ於
是起立磐境、山ニ坐ス少彦名命ニ」（書紀巻二ノ九〇二）

いはくら【磐座】（齋座義、齋座ハ磐境ノ語原ノ見ヨ）
神ノ御座。神霊ノ座（磐境ノ代ハ紀下ノ五「皇孫乃離天磐座ヲ、天降
於日向襲之高千穂峯ニ矣」天磐座ハ云阿蘇ニ能以蘇矩羅

大三輪神社鎮座之次「少彦名命来臨吾辺泮磐坐」（書紀）和二年
九〇三）永久四年百首歌「生駒山、手向ニコレカ、木ノモトニハムラ打チテ柳立
テアリ」

いはふね　「岩船」（齋船ニ表ハはさか（磐境）ノ語草ヲ見ヨ）
神代ニアリシ神聖ナル船。空中ヲ飛行シタリ。万十九ノ三十九、瓊々杵尊ノ
天降ニ「天雲ニ乗リ磐船浮ベ艤ニ真楫繁貫キ伊漕ギツ、国見シ
セシテ天降リコシ」ニ、紀ニ「知ラシ来ン天之日継トシ」万三ノ廿二「ヒカタノ
返探女ガ石船ノ泊テシ高津ハ浅セニケルカモ」（摂津風土記ノ逸文ニ據レバ天
降リタ[illegible]）神武紀ニ「東天磐船ニ乗リ是饒速日命」
（[illegible]年ノ「昔有天降之石」[illegible]）

8

磐樟船　「樟船」ト云ハ、樟ノ材ニテ造リタルモノ。神代紀上ノ九、次生蛭児ニ、載之於
天磐樟船而流之「伝」放棄」（高天原ニテノ事ナリ）

いはとさぶね　「磐樟船」　はしり石橋

いはだ、および　「岩田帯」（齋肌帯、実ハ、岩田ニ、臣民ニ、ムラ祝ニテ、ヒモ、ヒモ、織ル
ト云ヒ、地ヒレド）　○括染ノ模様

婦人ガ三ヶ月目ニ腹ニ締ル帯。貴婦人ハ白絹ヲ用ヒル
色ヒヒリ即チ儀ハ妊ノ者帯ル（上ニ帯ル）（ホ[illegible]）ユハタオビ、ハシタオビ、
呉竹集「いはた帯、紐結ト書ク、女ノ孕ミテノ肌ニ、元帯ル。月ト共ニ結ブ子
ヨリ「心苦シク月ヲ待テ」人知レズ肌ヘニ結ブいはた帯」合類節用、服飾

川「纐纈帯婦人姓帯」和名抄衣服門「結肌帯」

はこうぞうもし（形）（言ハムカタナシ、言ヒヂ方ヲナシ。撫ヒ難シノ意ノ便）言ハムカタナシ、言ヒヂ方ヲナシ。

はらばめ「岩燕」ばめノ一種、尾ノ短キモノ。浮山中ノ絶壁ニ接ム日光山ノ華厳ノ滝ニ群ヲ成キ名高シ

はつめ「岩代」化石ノ一形代ニ似テ大ニシテ甚シク光ル、鮫ノ歯ナリトモ云フ

はどのかどう「岩戸神楽」（天岩屋戸ノ神事ニ擬シテ云フ）里神楽ニ同ジ

いはとかしは（名）「磐常堅磐」（イハトコカタハノ約ト云フ）永久堅固ナル

万七ノ十七「吉野川石迹柏ト常磐ナス吾ハ面ムカム萬世マデニ」（イツセカラズ勝景ヲ賞観セムトノ意）

森むらや製

いはどこさ「石木賊」石解ニ同ジ、

はどこ「磐床」（ハ）石梯ノ中ノ寝床、死者ノ葬ラレアル所

万十三ノ三十「岩ガ根ノコゴキ道ノ石床ノ根延ル門ニ来ル」（換歌ナリ）

（三）堅キ床。（朝ニハ出居ヲ喫ス云ヒ）

万ノ十九「梯ノ穂ニ在ノ霜降リ磐床ト川ノ氷凍リ」

ほやゆ（名）「口無ノ意」梔子ノ色

新古今「ほやゆ雑上「九重ニアテハ童咲ク山吹ノ注ハ色ハ知ル人ナシ」

〜は、ばレ　石橋岩橋川ノ淺瀬ニ石ヲ並ベカケテ渡トコロヲ、今ニテ磯ヲ（イソト）

一クニノ三十二「明日香ノ河ノ上ツ瀬ニ石橋（イハバシ）渡シ下ツ瀬ニ打橋渡ス」石橋ノ下ニ

「一云石浪（イシナミ）」トアルハ石並（イシナミ）ナリ。同七十「岩月モ未ダ姫ナリ」明日香河瀬々ニ渡

シ石走（イシバシリ）モ無シ」同二十ノ十四「天ノ川伊之奈彌（石並）宜カバ續ギテ見ムカモ」

（三）石橋（イシバシ）、夫木ニ「暮ニ行ク木ノ下陰ヤ岩橋ノ御手洗川ニ玉ブ螢カナ」

（三）男女ノ恋ノ中絶エタル事ニテ渡ル役行者、大和葛城山ヨリ同國ノ金峯

山ニ岩橋ヲ架セト山神ヲ使役シテ造ラシメシニ工事半ニシテ成ラサリシ事

ヲ傳フ（扶桑略記）（葛城山ニ奇巖アリ其ノ巨ナリシ由）

於道ノ心、雜賀「岩橋ノ夜ノ契ヲ絶エズベシ明ケルマヒレキ葛城ノ神」

森むらや製

いはふ　祝ハ前條ノ清メテ吉ナラシムル意」

吉ニスルトス。ホグ、コトホグ、コトブク、賀ス、祝ス、

名義ハ祝イ祝イシ

祈年祭祝詞「皇御孫ノ命ノ御世ヲ手長ノ御世ト堅磐ニ斎ヒマ

"日本紀ニ見ユル歌「木免者（ケモノ）祝（ホギ）、皇ガ御子ニ名替セル心ハ君ヲ伊祢

ホリケリ」　古今序「鶴亀ニツケテ君ヲ思ヒ人ヲモ祝ヒ

著河集ニ、天皇ノ御時、良信公ニ、「君ガ多ハ、ヨロヅノ心深ケレ

バ聖ノ御代ニアトナラヘドゾ」

いせ　「齋」ノ齋ノコト。謹ミテ祀ルト。神代位下ノ主「齋主ノ神」ヲ齋ノ
之大人ニ」（軍ノ首途ヲ祭ルヨリ経津主神ヲ云フ）出雲国造神賀詞「伊波
比ノ尊ノ復命ノ神賀ノ吉詞ヲ奏シタマハクト奏ス」
（三）神ヲ祀ル事、又其人。垂仁紀廿五年三月「其祠立於伊勢国因
興齋宮于五十鈴川上」雄略紀「稚足姫皇女「侍于伊勢大神ノ
祠」」
いせのかみ　「齋宮」ノ伊勢ノ大神宮ノ別稱「垂仁紀、廿五年三月「隋
大神新其祠立於伊勢国因興齋宮于五十鈴川上」」万二ノ三十五
「渡会宮（伊勢）ノ齋宮ニ神坐。伊吹キマドハシ

いはぼしの　枕「石橋」（石橋ニ並ベル石ト石トノ間ヨリ近キ遠キ目ノ新シキ新シ
ク）
近き、遠き（斯ト五ノ語ノ枕詞。
万四ノ三十一「石走ノ間近キ君ニ逢ヒタルカモ」
（ツツセミノ人目ヲ繁ミ、
万十一ノ三十三「明日香川明日モ渡ラム石走ノ速キ心ノ思ホエマカキ」
万十三ノ四「石走ノ神南備山ニ」
いはばしる　枕「石走」（淡海ヲ淡水ニテカケタルナリト云フ）（萬葉古義枕詞
いはばしる　淡海ノ枕詞。万一ノ十七「石走ル淡海国ノ」（船）
同七ノ十八「石走ル淡海縣ノ物語セム」石走ル垂水「石走ル激流」ト
ツケタルハ枕詞ニアラズ現實ヲ云ヘル語ナリ
いはばはじめ　「射場始」ヲ見ハジメヲ誓

△（齋ハ齋戒ナリ）

*戊午年正月

いはふ　他ニ「齋」（ハ）いまふ（齋）ト直ズ△「ハ」ちかまち（神事）ニ参シ、ニ参シ（暫）

（二）齋ニ清マリ謹ミテ祀ル　齋祀

「今案」天照大神（方十ノ五十「祝詞」ノ二十ノ廿三）庭ヨリ阿波波神ニ小柴刺シ我ハ伊波波ム帰リ来マデニ」同ナノ四十一「天地ノ神ニ潮オキ伊波波ム」名義ハ「齋イハフム」

（三）神齋ヒテ寄リマサシム　万十九ノ四十二「大船ニ真楫シジヌキ此吾ヲ唐国ヘ直ル伊波潮神タチ」

（三）イツキ　万ノ二十ノ三十五「チハヤブル神ノ御坂ニ潮マツリ伊波負命ハ母父ガタメ」（我ガ命ヲ大切ニ思ハ誰ガタメ）齋児ナトモ

を是とす。

森むらや製

いはひうた　「祝歌」祝ヒコトホグ歌　頌歌　古今序「六ツニハいはひ歌」

~~祝言~~

いはひづき　「祝月」正月五月九月ノ祭、日次記事「九月、祝月ニ当ル」

年中、正五九月ハ故ニ人ノ忌ミ慎ム月ニ「祝月」

いはひどの　「齋殿」神ヲ齋ヒ奉ル建物　北山抄ニ「厳殿」

いはゐ　「家」ハ（家）ノ俗ヲ見ヨ

いはびと　「家人」ハ（家）ノ俗ヲ見ヨ

いはぶき　「不言」唖ノ異名（備後出雲）

いはひび　「祝日」祝事ノアル日

いはひごと　「祝事」祝フベキ事、慶事

いばふ　自四　（三）嘶　（二）いばゆ　轉　馬　（字書抄ノ嘶イブ、馬鳴ナリ　有三北牛馬ノ駒北屋ニ　ばふ　ルビ）

（三）語ノ唱クミモ　（リ）　清松ナ仮言ノ上「此関（逢坂関）ハ鳥聲ヲ聞キテ去

聞クルトモフコトヨ　知ルト聞キテ　御供ノ人ノ中ニ　ばく（タル者）マリテイザ試ミムトテ云ヒ」

いばづき　岩路　ゆきの　ゆはの　名

いばくら　（上馬）　緒　ゆはの　ゆ　ハ　ロ　語

いばきはし　形二　敬言　言ムコト　欲シ　イヒタシ　狭衣ノ下ハ「心ノ思フコト

ゆはきはしき事モ　ツヤシク　ハ　ツカ　シクテ」

いはむ　自四　滿　迫　集マリ　滿ツ　充滿ス

神武紀ノ「有兄磯城軍布滿於菟田之道」　虜兵滿路難以往還

同ノ「屯聚居、此云和泊瀰茇」　皇極紀四年二月「雨下漳水溢庭」　者

明紀六年九月　名　茇ニ　所ニ　誅　散　矣」

いはむら　磐叢　盤　ドモノムラガリ　ル　形　上ノ二天八十ノ中

箭盤村　「河内」　石　「ヲ一ノ十四　上ノ湯都盤村ノ草蔭サズ」　神代紀下　「天安河辺所在五百

いはむろ　岩室　いはや（岩屋）ニ同ジ　名義抄「宮屋、イハヤ、イハムロ」

（大体ノ製造ニ云フ）

〔ほーむーや（名）〔況刻〕（下ニモ言ヤヲ言ヒテ「言ものは何ヤセムコトを言ヒ
むやはノ意より」（手爪語）（二）言フニ及バズ。言フニヤ及ブ。
空穂、藤原君ナル「天女ト申ストモ陰リマシナム、いなんや婆ノ人ハ国王ト
御ユトモ趣キタリトナムをや」竹物集五ノ四「源信僧都ハ丈六ノ作ハ
人、決定往生ノ行ナリトコソ直ヒケレ、申サムヤ十八丈をや、況ヤ人ヲ銅
をや」（三）副詞ノ如ク用ヰラレテ、マシテ、ソノ上ニ、竹取「いなんや龍ノ頸ノ
玉ハイカガ取ラムト申シアヘリ」伊勢物語「文をだにしカラズ
詞を言ヒ知ラズいなんや歌ハ詠マザリケレバ」
いはむーもの（名）言ヒ方。言ハムヤウ。万十九ノ三四「心遣ヒヌ将言為便
為ム為便知ラニ」

（忌火ニ縁ナキ語カ）

いひ〔飯〕米ヲ蒸シ又ハ水ニテ煮クルモノ、蒸シタルヲ強飯、煮タルヲ姫飯
通常ノ飯ハ一ツ（表紙ニモ云フ）
神代紀上ノ三十「保食神ニ口ヨリ飯武甕槌ノ命ニ伊弉
諾ノ尊ニ奉リ」
題字紀ノ「酒食」
いび〔指〕（ゆびノ略）ゆびノ略
いひ〔言問〕他ロ言問ヒ語リテ夜ヲアカス、カタリアカス。枕草子、土ノ…「曙マデ
いひあかして帰リヌ」
いひあげら 他ロ〔言揚〕言ヒツノル。落窪、二「タダ言ひ言ひあげりて車ノ床
縛ラレナム切リテ」
いひ-いづ ツル 他下二〔言出〕言ヒイダス、言ヒアラハス（後撰ノ恋四「池水ハ言ヒ出ヒテ
離ケド」）

いひうまや 「飯驛」 みづくまや ヲ見

いひおとし 他 「言葉」 (二) 言ヒノコス。言ヒモラス。

(三) 貶トシテ言フ、言ヒケナス 拙作ヲ、世ノイヒ 源、ケツ二キ、一心 貶ゲニコソ

見エメレド、いひおとし

いひかねーそそ 他下二 「言難」 言フコトヲ得ズ、

いひかふ ルフ下二 言長 外ノ言葉ニテ言フ。言ヒナホス

いひかぶせる 他下一 「言被」 言葉ヲ添ヲ着ス

いひかまふ ルフ下二 「言搆」 「解」 言ヒ做ス。 源、浮船、ニナセ カドカドレキ

人ニトカケ、いかまへ テヨ殺ネヲ益ヒタリ

いひがたし 形一 「言難」 言フコト難シ、イヒニクシ。

いひでう 「言條」 言フベキ條件

いひなし 「言做」 言ヒナスベ。 ルガ如ク言フ。

いひつけぐち 「言付口」 イヒツクルコト、ツゲグチ。

いひなほす 他四 「言直」 改メテ言フ。言ヒカフル。

いひなす (ヨ) 「言成」 言フマ、ナルト、言成 沒落、言成 傍題ヲ言フガマ、ニマカスルト、

いひなるる ルンし 他下二 「言馴」 口ニ馴レテ言フ

いひにくし 形一 「言難」 言フコト難シ、イヒヅラシ、

いひにげ 「言逃」 言ヒテマギラスル。言ヒクロムル。 イヒヌケ。

いひは

いひば 「秩序」「形容整ノ意」

皮膚ニ生ズルモノ、今、ハ。 字鏡ニ「肌疵 伊比保」（俗名坊同じ）

~~いひまぶす~~

いひまぎらす 他四 言紛 事ヲマギラシテ言フ（イヒマギラハス）イヒクロムル。

いひまらはす 他四 言紛 他事ニマギル、サウニ言フ、イヒマキラス。イヒクロムル。

濱ノ真砂 「言歌」リシヅベキキ、ひまぎらはしテ」同若菜上、百六「異事」

いひまぎらはしテ

いひまゝ 他四 言捲 論ジテ他ノ言ヲ遮ル。退ク。 説破

いひつかる 自四 「あづかる」ノ訛原ヲ見ヨ」 言ひつけらるノ約。命ヲ受ク。

いひがみ 「飯噎」 飯ノ口ニ噎ミヤハラゲタル 児ニ噛ム者。

紫式部日記ノ三十四「取好人 為乳母 湯母 及飯噎 湯坐」 箋疏「噎飯 噛児者」

いひきかす 他下二 「言聞」（二） 告ク、諭ス 諭

三 誹諧ス 説諭 説得

いひきなり 「言来」イヒツタヘ。 傳説

~~いび 伊勢島名詳ナラズ 五位ニ昇ル ナリトアリ。~~ 俗名坊十八ノ十六、 鵠鶴、伊勢

いひたむ 他四 「言ト」 言ヒスル。

いひ、ものゝ　他四「言知」言ヲ知ル

伊勢物語（百七）の段「若ケレバ、文ヲ書キ、歌ヲ詠ミ、心ニ思フ事ヲ、言ハズ、況ンヤ歌ハヨガリケレバ」

年中行事歌合「クケダカク詞いひしりテヨロシク侍ベシ」

折節ニ言フニ、知ル所ヲ言ヒ、ナル古今の序、三「明ケヌレバ、イヒハ心ヅクカニナド（多クハ言フヲ言ハレタル）

いひ、ものゝ思ヒ添フラム」拙草ヲ、三（十三）の段「九重ノ内ヲ始メテノ、ハ、ものゝ民ノ住ヒ

ハ、ヲ

いひ、ものゝ　他下一「言ヒ、ものゝ」言ヒヲ言ヒ

いひ、ものゝ　他下二「言初」言ヒ始ム

万葉ノ三十「河千島、住ム澤ノ上ノ霧ノ著クカナ相言始テバ」

いひよせ　他下二「言寄」因ミテ言フ。イヒカク。

いひりふ　他四（いひ、ぶる）「掘ふ」ヒラ、ル。

万十六「螺ヲ伊拾持テ来テ石持タツニキヤブリ」

いひ、うる　「訓」「饑」（飢飢、義）飢ウルコト、饑饉ナリ。

宣化紀二年五月「黄金萬貫ヲ、不可瘞飢」收藏穀稼「蓄積

儲積」遺設ニ、凶年。

いふ、に、ものゝ　他四　言フニ及ブヤハ、言ロフマデモナシ。

いふ 他ロ 結 結ノ姓、永久四年百首「石竹ノ花咲ク宿ニイカニシテ分ル」
好キ竹ヲ分離ニ 分マシ 東鑑ニ名所付 島田「萩原ノ女ノ髪ノ ツリモ
髪セメテ島田ニ ゆふ由モガナ」諸國盆踊唱歌(貫之) 播磨「髪ヨ
島田ニ ハラヨリ御方、心シダニモチナサル」

安恵ノ字ハ左傳隱公四年ニ「阻兵而無親衆」「安恵無親」註「安恵則刑過 形過則親離」トアリ

いぶり 憤 息吹 輝 振輝 振輝直ス 訓ニ出サズ息吹ガ如ク怒ル意ナル(ト云フ)
(二)イキトホルコトヲ心ニ怒ル 神代紀上ノ九「素戔嗚尊「有ニ男悍
以安恵 釋紀、私記「伊弉諾流」「訓」安恵ノ噴セ」(安恵ノ 左傳隱公四年
殘心ハ、ヲヨリ 貫ル九
(三)スネテ強情ナルコト 剛愎 宗祇、児訓抄「人ニハスネテ、ヲリニテ」
いぶる 自四 「火燃ル」(息吹クノ意、振輝直ス)
火ヒ 燃エズブスブル、フスボル、クスブル
いぶせ 煙 火燃ル 代事、とぼる、とぼす」 (オボツカナク思フナリ)
いぶかる 自四 「燃ル」 イブカシクアリ 燃ル陶シクアリ (オボオボシクアリ)
万九ノ廿二「雲居雨降ル知ル沙数ヲ清ニ照シテ言借リヲ國ノ真保良ヲ委曲ニ示
ツクヤ(ツヅ)ケ」(山神三ノ)古今集序注「主ト主ノ、ヲ、ヲ思ヒ」

いぶかし　形二　[illegible]（不明）

（二）オボツカナシ。ロ　[illegible]

万四ノ三十九「相見ズテケナカクナリヌ比日ハイカニ好クヤ言借吾妹」

万十ノ十三

万十二ノ十二「ウタテ異ニ心搗動ヒ事計吉者吾ガ兄ヲ金ル時ダニ」

いぶかし　形二　不審（前後ノ文ノ意ノ轉ズルモノカ）

欽明紀二年七月「未審何縁輕用浮辭」

いぶかる　他四　訝（未審ニ思フ）（前後ノ文ノ意ノ轉ズルモノカ）

古今十二「逢ヒ借リシ國ノ其人ハ誰ト未ダ知ラネバ」

怪シミ疑フ　不審ニ思フ

いぶかしむ　他四　搗動ス

万十二「[illegible]」

万十四「秋萩ノ散リ乱レ搗動ヒ[illegible]」

万十ノ十三「眉根掻キ心搗動ヒ何カ之美思ヘリシ妹ガ容儀ヲ今日見ツルカモ」

いぶせし　形二　鬱悒

万四ノ五十六「ヒサカタノ雨ノ降ル日ヲ唯獨リ山辺ニ居レバ搗動ヒ有ケリ」

同ノ四十「雨隠心搗動ヒ（イブセサニ）出テ見レバ春日ノ山ハ色ヅキニケリ」

同十ノ五十三「長月ノ時雨ノ雨ノ山霧ノ煙ル吾ガ胸誰ヲカ見バ息マム」

[illegible]「疑ヘル心搗動ヒ事計吉者吾ガ兄ヲ金ル時ダニ」

（三）[illegible]（ユカシ）万十ノ三十四「水鳥ノ鴨ノ住ム池ノ下樋無ミ（序）鬱悒君ヲ今日見ツルカモ」

（三）厭ミ苦キタナシ　砂石集、一ノ上「毋ミ候者、悪キ病ヲシテ死ニ侍ル者ハ人ニ厭ハレ嫌ハレテ見ル人ナシ」

いぶかへ　日本書紀「息吹（いきふく）人の息、息霧（イキキリ）、いきほふ（勢）同趣」

息ヲ吹ク　雄略紀。三年「呼吸（イキヅカイ）氣息（イキ）以花朝霧」大祓詞「氣吹戸主（キフトヌシ）ト云フ神、根ノ國底ノ國ニ氣吹キ放チテム」

いぶき　「息吹（イブキ）」イブクコト。息。神代紀上ノ廿二、天照大神ノ「噴棄氣噴之狭霧（サギリ）」

霧噴　此云伊澤岐（イサギ）」　風ノ吹クハ神ノ息ヲ吹キタマフナリトモ　風ニモ云フ　神代紀上ノ土、伊弉諾尊ノ「吹撥之氣化為神」師ヲ曰級長戸辺（シナトベ）

命云フ是風神也」万二三十五ニ「度會ノ齋宮（イハヒノミヤ）（大神宮）ヲ神風ニ伊吹惑ハシ天雲ノ日ノ目ヲ見ヤズ常闇ニ覆ヒタマヒシ」ナド云ヘリ。

いきけいて　異文類聚　ダキヅカリノ異名。

いぶつ　遺物　死シタル後ニ遺リタル物、カタミノミナ。

森むらや製

ゆづじやう【揖譲】（揖、一入切、音ユウ、いつぶかり、いづじやうト訓ムハリ、ふかい（立礼）
ヲリ、れいとも訓ム、例ナリ六書故「揖、拱手上下左右之以相礼也」
會稽ニテ譲ルイ、論語、八佾「君子無所争必于射歟揖譲而升下
而飲」字和抄「揖譲イヅレザマ」揖、イフス」
いぐん【異聞】コトナリタル キキゴト
いぐふう【異風】後ニ選リタル風儀。ムカシノナゴリ。

表むらや製

いへ【家】（寝戸、家、宿所、室カ）屋。ヤケ。ヤカ。ヤカス。イハ。
（二）人ノ住ムガタメニ作ル建物。古事記、下（履中）ノ巻。火災ノ燃エル伊勢
群妻ガ伊勢ノカタリ「宮ノ家、伊戸」倭名抄十ノ巻「家、人所居
也、伊閑」（三）吾ガ家。自宅。方言五「愛ミケヤ」伊勢ヲ離レテ」
家ニ帰ル「家ヲ忘ル」（三）妻。空穂、たゝなせル「フビンナルコトナレド左大臣
いへ、昔ヨリヨロヒカラズ、心キヨエル人ナリ」（四）ウカラヤカラ、家族、一族、竹取
「右大臣阿倍御主人ハ、貴豊カナ家ヒロキ人ニゾオハシケル」家ヲ治ム」家ノ
乱」（五）先祖ヨリ相続シ来ル代々ノ跡。名跡。家名。「家ヲ継グ」家
ヲ興ス」（六）家柄。門地。源、御華ナニ「家高ク、人ノオボエ軽カラズ」
（七）小道具ヲ納メ置クガタメニ特ニ作ル箱ノ類。鏡奩ナド是ナリ

一カ月四十四「人事ヲ繁ミヤ君ヲ二輩ノ家ヲ隔テ、変ヒツ居ラム」

家ヲ出ヅ、家ヲ捨ツ　僧トナル、出家ス。（俗家ヲ出デ、佛門ニ入ル意

源御匠、三ノ「ヒトタビ家ヲ出デタヒバカリニテ此世ヲ厭ミムトハオボシオキテズ」

続古今十九、雜下「サテモマタ、何事ヲツヒノスミカトテ家ヲ出デムト思ヒタツ人」

いへ　カリ　家借　他人ノ家ヲ借リテ住ム。借家。

いへ　ぬし　家君　其家ノ主人

いへ　がまえ　家構　家ノツクリカタ。

家櫻　己カ家ノ櫻

いへ　ずみ　家墨　キビミク建チヅキタル

いへ　ずみ　家名　其住宅ノ呼名。（小松殿門脇殿　清盛家北家ノ如シ　商

家ニテ　梅屋　菊屋　伊勢屋ノ如シ、屋號トモ云フ（屋ノ條ヲ見ヨ）

いへ　なし　無家　住居定ラズ流浪シテアルク。三四廿二「家ナシ」

いへ　の　まもり　家君　其家ノ主人、枕草子、十二「家の君ニテアルニモ誰カハヨシ

アシコヒ　ヒルムル

いへのこと 家子 (一)其家に生レタル人。同じ家内の人。万五、三十「天ノ下奏シタマヒシ家子ト選ビタマヒテ之ヲ唐ノ遠キ境ニツカハサレ」(遣唐使多治比廣成ノ贈リシ詩ヲ唐成ハ立化天皇ノ舅ナリ)

(二)次男三男以下 支族ノ者 其本家ノ従僕 庭子 家人

吾妻鏡、二、元暦元年春十四日「河越太郎重頼息女上洛ス、家子二人、郎従三十余騎ヲ従ヘシ」(三)従ニ、又、其家ニ仕フル従僕ノ者、家僮

いへのこと 家集 (勅撰ノ歌集ナドニ對シテ云フ語ナルベシ)

其人ノ詠ル和歌ニ集ル書、一人ノ歌集、貫之、躬恒、伊勢、中務、源順、能宣、好忠ノ集、散木奇歌集(俊頼)山家集(西行)拾遺愚草(定家卿)

いへのこと 家具 家ノ内ニ用ヒル道具、家具、イヘノモノ、又、家具、

空穂、風流下、厨子、唐櫃、几帳、屏風ヨリ始メテ家ノ具アリ」

いへのこと 家女房 貴族ノ奥ニ仕フル女中。

いへのこと 家紋 其家ニ用ヒル紋所。

いへのこと 家研 本阿弥氏ノ家ニテ刀剣ヲ研ぎ、ダコトノ種、鎌倉時代来

相模 鎌倉ニ妙本阿弥ト云者アリテ刀剣ノ新古真贋ノ目利、研磨、礪ヲ

業トセルガ是利厚氏ニ従ヒテ京都ニ移住セリ 松田氏ヨリ其子本阿

弥氏ヲ 家名トシテ代々相継ギテ徳川氏ニ仕ヘタリ

いへのこと 家流 狩野流ノ絵ヲ是ニ

いへーびと 家人 (二) 我ガ家ノ人。家族。万十五ノ十五「伊豆処業帰リハヤ
来ト齋島、齋ト待ツラム旅行ク我ヲ」
(三) 家ニ仕フル人。家人。源氏屋、四「昔ノヤウニ思リアラネド、ナホ親シキ家人ノ
内ニ数ヘカヨヒケリ」
(三) 貴族ノ家ニモ人同候フル人。伊勢集「前栽植ヱテ砂請ヒケルニ家
人ニ云アラク人ノ奉ラムトテ砂ヲオコセタルニアキカタノ少将ヨリケリ」
いへーばり 家離 後藤離ノ條ヲ見ヨ
いへーむら 家群 家ノ群ヤリテアル所 古事記、下(雄略中)ノ十五「火矢ノ燃ル
伊勢物語 妹ガ家ノアタリ」

続後拾遺 十、賀「いほ年」 五百?

いへーやう 家様 吉屋ノ名、せんじりうノ條ヲ見ヨ
いーほ 数 五百 (一) 五百。竹取「五百日ト云フ辰ノ時ヅカリニ」(三) 数ノ多キヲ云フ語。神代紀上ノ廿「五百箇ノ御統」万ニ三
十七、天雲ノ五百重カ下ニ」同十八ノ四「白珠ノ伊保箇集ヲ手ニ結ビ」
いほーつ 宮 五百箇 いほ(五百)ノ條ヲ見ヨ
いほーへ 五百重 いほ(五百)ノ條ヲ見ヨ
いぼ 疣 「瘡 (イボムシリ) 疣 義、此虫ニ刺ラレバ疣ヲ発ス 花落ツレバ五ツノ本草ニ
此虫ニ刺ラレ疣ヲ発ス 記セリ 藝文類聚「燕趙之際謂之食肬」

ゑびぼもとり 蟐蟖（イボ）（疣ヲ降ク意、雨雅、疏、「一名屹肱」東壁本
草「燕蝤之間謂之蚝肱、肱、即疣子、小肉贅也、今人病肱者、
往々捕此食之」（東雅三十）藝文類聚「燕蝤之際謂之（音復）肱」
虫ノ名異ニテ、ぼもとり、又ぼうとり、ぼうとり、又異ニテ、ぼうとり、ぼもとり、
ほくひ、今ノ専ラ、ぼうとり、ト云フ其條ヲ見ヨ
未詳 蠶ノ芋「螺蛸、伊比保利」
字鏡六十八「蛣、伊比保利、螺蛸之母也」（螺蛸、おまちがうこ
ニテ螳螂ノ巣ナリ）倭名抄十九ノ九「螳蜋、以保無之利」字書抄「螳
蜋、イボウジリ」新撰字記「蟷蜋」

いぼうし 自口「廬」（廬ヲ治ムルニ宿ル者ノ例）廬ニ作ル、端
万二ノ四十二「荒磯ノ廬作ヲ見レバ浪ノ音ノ集キ潮辺ヲ五ル」
同六ノ三十八「河口ノ野ノ廬ニ廬ヲ夜ノ歴レバ」
いほり「廬庵」（一）イホルコト、廬ニ宿ル
同十ノ五十一「田鶴ガ音ノ聞ユル田居ニ五百人ニテ」
（三）軍隊ノ駐屯所 則誓 倭名抄十ノ十二「營 伊保利、軍營也」
神武紀「皇軍徙營於別宮」
（三）廬。万十ノ○○「秋田刈ル旅ノ廬ノ時雨ニシテ我ガ袖濡ヌ乾ス人ナシ」
（四）廬形ノ墓 「廬ニ木伏ノ紋所」
ほうがた「廬形」特棋 倭名抄十ノ十二「紋所ナリト雖モ墓ニ夫イホリ」
敦ノ條

ほうがんぶん 【廣看板】（廣形ノ看板 なだいぐくしゃノ作ナリ）

いはりぶん 【廣點】 筒條書キ文書、連書ノ和歌、連署ノ姓名

ナドノ類ニ

廣形ノ點

（ハ、如ク朱墨ニテ記スモノ、関ニ入ル證、可トシタル證トス）

いまき 【今来】 新ニ来レルコトヲイフ。新参。新年 儀式、六、元日朝賀、

「番上集、今来集人」 韓人漢人ナドノ新ニ帰化シタル人ニモ云フ 新帰化 雄略化

「百済所貢今来才伎」 推古紀 「新漢人大國」

いまき 【湯巻】（ゆまき）ノ特、ゆく、いく（行）ぬぎ、いぬぎ（脱）

（二）湯巻ニ同ジ、貴人ノ浴ニマハル者ノ上着ノ上ニ着ル服。侍中群要、五「今来、奉ニ

仕御湯殿ニ之人、所著衣也、生白絹也」 吾妻鏡 寛元二、建長四年四月

紫衣、初見「女房皆申ス御湯殿ノ事ニ」

森むらや製

一日「御明衣、一、今木、一」

空穂 春宮（春日諸ノ末ニ諸ノ）「佐ノオトヾ生絹ノ袿、ゆまきニテ湯殿ニ

ものせん」 紫衣初見、中宮御産「女房ども、御湯殿ノ、ゆまきナドニ」

（三）女ノ湯具。女褌。

いまさう 自四【坐】（いまさノ延、續キテいまさ意、かくさ、かくさふ（隠）かへ

すかへさう（復）同ジ） いまさ（坐）ニ同ジ。

陰陽寮式「平ケク穏ニ伊麻佐布ベシト申ス」 續紀、廿七、天平神護三

年八月宣命「諸ノ大法師等ガ理ノ如ク勤メテ坐佐比」

いまし（汝）（坐）（汝）（坐し義、敬語ニテみまし）ニ同義（英俳ノ見ヨ）

汝ニ同ジミマシ。神代紀上ノ四「陽神問陰神一曰汝身有何成耶」

垂仁紀、廿六年七月「天皇是之親問清彦一曰爾袍中カ了者何カ了

セ」ヲ十ノ十四「伊麻恩モ者モ幸城ル（シヤ）」字鏡九「倆、汝也、伊万之、

又、支三」（タフチネノ毋ニ障ニバイタツラニ）

「宮供造」（ツクリマツラムト）

いま（名）（今）（世）（日ノ前ノ時、サヒアル時、マノアタリ、現在、目下、

古事記上ノ三十九「伊麻コソハ千鳥ニアメノ後ハナドリニアラム子」（伊勢ノ三十二段

「昔ヲバまこと由モガナ」

（二）スミヤカニ。急ニ。古事記中（神武）ノ九「敵（ハ我ヤ飢ヌ島須鳥、雉鳩

（ガ）（伊麻聊）（ヒ）（ヒ）（ヒ

いま（接頭）今 〈今更に意カ〉コノ久シ、更ニ加ヘテ。マ。モ。モウ、更
万葉ノ五十、吉井君萩ノ夜咲ケリ見ニ行マセ
催馬楽、難波潟、漕ぎ（モテ）ヰル、小舟大舟、五、〇〇スコシノボレ山崎マデニ」
北末
いまヒトツ」いま一日」いま一度」
今日バカリアヅド散リナム」

（但、標ナラマ歌稿、イママツリ。今屋。）

いま、さう 今様 （二）今テノ世ノ様、當世風。時様 時勢
白氏文集ノ「時勢」
源、胡蝶ノ巻「歌（アサ）ヒガマシヤ 今ヤウノコトノ便（ビン）ナイコト、為出デナドタル」
枕草子、一〇〇段「是ハ、昔ノ人ニ、今ヤウヤウ、ヤスゲナリ」
徒然草、サニヨ「何事モ古キ世ノミヅ基、シルキ、今様ヤムゲニイヤシク
コワヤリユクメル」（三）今様歌ノ略。
異ニシテ、いまみフトミエ五ヘリ
いまオラーラた
今様歌（新ニ流行リ出テタル歌ノ意）
唱歌ノ一種。催馬楽、風俗（サイバラ）（フゾク）歌ニ次ギテ世ニ行ハレタリ。多クハ七音句五音
句ノモノ、四句三節ニ成ル。佛教ノ和讃（ワサン）ヨリ出テタルモノナリ。以呂波歌ノ「色ハ匂ヘド、散
リヌルヲ、我ガ世誰ゾ、常ナラム、有為ノ奥山、今日越エテ、浅キ夢ミジ、酔ヒモ

セズ」平家の「僧モ昔ハ父ナリ、我等モ亡ビ、佛ナリ、イヅレモ佛性具
ル」蓮ヲ、陽ル、ミヨ、悲シケレ」ナド皆佛意ヲ詠メリ。紫日記の「若ヤ
カナル山達、いまやう歌ヤ」枕草子の「歌ハ今ヤウ、長クテクセヅ
キタル」枕衣の「アヤレノ今ヤウ歌ドモヲイトシラゲニキ聞テ歌フ」
明衡往来上「遊女一面船於蓋葦間、発今様之曲、可謂
象外之遊」後拾遺物語、何事ヲモ詠ジリ。平家の「古キ都ヲ来
テ見レバ浅茅ガ原トゾナリニケル、月ノ光ハ隈ナクテ秋風ノミゾ身ニ沁ム」
平家の「蓬莱山ニハ千年歴ル万年千秋重ナリ、松枝ニ鶴巣
クヒ、巌ノ峡ニハ苔ヲ敷」

中古

広録

拾玉集の「春ノ野ヲ、ノ媚ニ四方ノ山ビヲ見アクセバ花サヤリカモ皇ノセニラス岸コソナカリケレ」

いーまさに 自四 座 (い、ぎ迫) (一) 座すと同じ、柳り歌淡
雄翠化ノ「玉鬘ノ胡床ニ伊麻同ニ我ガ伊麻勢バ立」私記
「伊者、殿後、座セ、光入相兼ヲセ」万一ノ廿三「敵火ノ此美ヲ山ハ立タ
山サビ伊座ス」(三) 行キタマフ、オハシマス、万四ノ四十四「夕闇ハ路タヅノ、し
月待ケテ行セ吾カ夫ヲ其間ニモ見ム」内十五ノ四「大船ヲ荒海ニ出シ伊
麻須君、隙ムコトナク、ハヤ帰リマセ」(三) 来タマフ。竹取「安倍ノ大
臣ハ火鼠ノ皮衣持テいましレカグヤ姫ニ住ミタマフナ」
いまさにたり 自下二 座在 前條ノ(一)(詠)ニ同じ、居タマフ。枕草子十、「三三
「所笑ナリトテカク笑ヒいまさるガ恥カシ」大和の「宮仕ヘタマヒケレバ
工ニ年ニモいませザリケリ」(三) 前條ノ(三)ニ同じ、行キタマフ、伊勢の「あ
「カヤル道ハイカガいまさるトナ」

(マスカリ、イマシカリ、居タマフ)
(オハス、オハシマス、エガル)

いまさるたれ　仰下ニ　座　座サレム、居ヲ教ヘ

敬意ヲ　「居請」三尼、大金堂設齋　廿二ノ十八ノ望ノ日ニ出デニレ

月ノ高サニ君ヲ座セテ何ヲ思ハム」

いまさがり　ルテリレ　自良麻呂　在　在ますがりノ約語ナリトモ云フ」

在す　同ジ、いまさがりトモ云フ、居タマフ。

空德　だこくを「父大殿ノ、いまさがれバソカク侮リタマフ、いまさがらズバ何ヤ

ツツマム」伊勢、五十七段「右大將、いまさがりケル藤原ノツネユキト申

スハ、いまさがりテ」今昔九ノ第十條「宰相ノ御心ニ、傑武ク坐ケリケル」

二月九

分

いまさせ　「今撓合」

いまやうにぞかた　「今様姿」世　其當時、風ヲ　イマヤウ

△名義抄、米部「時樣　粧、イマヤウスガタ」　長明無明抄、下「今ヤウ姿

ノ中ニ好ノ御ニツル　誘家モツシルコトナシ」

いまよし　「今良」　花りやう（今良）ノ條ヲ見

いまいり　「今入」新ニ入リキル者。　新參。

いまし　「今」（志ハ指ニテ五ノ助辭）　今ニテ今、アノマタリ、スナハチ。

神代紀前代「書」新羅王ニ、失志乃今醒之曰ニ」　上代。月日

「いまし臨辭ノ居テ淮ヲトコロヤリ」名義抄、雜部「向來　イマシ　タイラ

「及イマシスナハチ」

いまだうん 「人ヲ道ニ」新ニ落リタル道ニ者。

いまを（麻）忌まを（緯）ノ轉、其條ヲ見ヨ「麻ヲいまを」

いまふ 他四 忌（イミ）む（忌ム、將然形）いまヲ活用ス 笑む、忌まふ」

忌む ニ同ジ（忌ヒ言ナドヲ言フ 物忌ミテ言葉ヲ言ハズ言葉。）

いまひだと 「忌言」イマフコト（イミコトバ、ガニコトバ。）

物忌ミ言葉ナドナリ」多（胥）ヲ尺、葦（畫）ヲよし、鰌（否）ヲ名高、梨（無）ヲなりワヤ、鄙

いまめかし 樹名、うはめかし ニ同ジ

いみ〜あひ 「意味合」意味ノナド

いみ〜がき 齋垣（イガキ）ニ同ジ

いみ〜ざね 「忌部兒」喪中ニ出仕ヲ許スコト、除服條ヲ見ヨ

いみじ（シキレケレ、シクレ）形（三）「忌」（齋、忌ヲ活用ス）「其事タツ意」

（一）齋ミテアリ。竹取「いみじく靜ニ齋ミ（スサヤビ）ー（ヒトノホカリ）御文奉リタマフ」紫日記（田宮公子自士）

（二）甚シ、ユユシ（イキドホカリ）（三）甚ダ悪シ正ニ直（ヒタヒ）甚

源相模ニ「いみじき題物ドモヲ捧ゲタテマツル」御物怪（モノケ）いみじう コハキナリ」

四尋木ニ「いみじう霖雨降る」更科日記「殺、いみじう

ロルハ、シクテ」諸好典侍日記上「院ヲ大臣ヲモいみじトモワラフ」「陳ナ顔ニ

「年ヲ経テ美ジト思ヒ侍ル」（ワリ）枕草子「一ノ中ノ（ニノ中ノ）あ「姿ゲニ腫レアサビタル大ノロビタル」

き蓮人大將ニ」宇治拾遺「ニノ中ノ後重トテいみじ

いみ〜だち 「齋館」神館（ケンカン）ニ同ジ、いみじ〜條ヲ見ヨ

いみーべ　いむべ（豆部）ノ條ヲ見ヨ

いみん　移民　移住セル人民、後ニ植民トイフ

いむかふ　自動　向（いハ接頭）　向フトヲツ向ジ　神代紀下ノ二十「國神有強禦之者」　万十ノ三十二「天ノ川、射向居リテ」　二度倉ヲ妻ヒニ」

いーむ　齋殿　齋ノ事ニカヽルツトメ

いんーざと　いむさと（齋里）ヲ見ヨ

いむーさき　齋鋤　齋ニ使メタル鋤　祭事ニ用ヰル也ノ、大乃宇枝ノ「齋鋤」

いむーはしら　齋柱　しんのはしらヲ見ヨ

いみーはだをの　齋服殿　齋ニ浄メタル機殿　神代紀上ノ…ニ「天照大神方織神衣居齋服殿」　私記「伊美波多止乃」

いむはだをの　いみはだをの（齋服殿）ヲ見ヨ

いむーび　忌火　（齋ニ浄メタル火ノ義）　神事ニ用ヰル火、火鑽ニテ造セル火

高橋氏文「豊日天ヲ今火鑽ニテ造リテ忌火トシテ齋ヒ由麻ニテ共御食」

四時祭式、上「齋火庭火祭」　江家次第十五、大嘗会「主殿寮以齋火設燈燈於西院」　忌火の御飯ト云フノ六月十月ノ一日ニ特ニ奉ル供

江家次第七、六月「忌大御飯、六月十月十日一日早旦供之内膳」

「江次第抄、七「毎至神態、鑽火炊爨、謂之忌火也」

いみーび　齋日　忌日　齋戒スル日　福ナドアリトニヤ

（いみべ）

じむべ 「齋部」は「忌部」なるべし。宗神紀の「忌部」

いむべ 「齋部忌部」（いみべ）の音便。齋ミキヨマリテ奉事スレバ名アリ」

（イミベ）月古ノ職名。祭器ヲ作リ祭事ニ仕フ。後ニ姓トナル。

神代紀上ノ「忌部遠祖太玉命」古語拾遺「令天富命率齋

部諸氏作種々神寶」又捧持天璽鏡劍（奉安正殿）」

（印相）

（賛語）毋陀羅（ムドラ）ノ譯語。佛菩薩ノ本誓ヲ表ズル標識ノ意ナリ。ムズ印相（インソウ）ト同ジ。

いんぞう 「印相」真言宗ニテ陀羅尼ヲ誦スルト共ニ両手ノ十指ヲ種々ノ形ニ屈シ

セシムルヿ。畧シテ印トノミモイフ。其屈曲セシムルヲ印ヲ結ブトモ其意義ハ秘密

ナルド呪詛スルコトイクバクナリ。（真言ノ師匠ノ印ハ無量ニアリ 金剛界 大日 胎蔵界 大日 ノ印）

須臾ノ間ノ「心ニ念ジ真言ヲ誦ミ印ヲ作テ」（東稚日記「佛神ノ文ヲ人

ヒトリモ知ラズ」）井ツカタにん 徒然草ノ巻「印ヨドぐとり むすび出テドトシテ」

（佛教ニ云フ語）

いん（名）「因」（因縁）いんえん（因縁）ノ條ヲ見ヨ。

いん（名）「引」漢文ノ一体。序文ノ末、

いん 「淫」ホヅ。ニヤヂリ。淫水。精液。義注後名抄、二ノ四十七、「精液俗云淫」

（小説雅「男女不以礼交、謂之淫」）（二）淫慾。砂石集、九ノ下「心ニ淫ヲ絶

タザルナホ魔道ニ陥ル」邪淫戒」（三）

（十）今昔ニ、「身ノ内ニ淫ヲ入レバカクナム子ヲ生ミケル」

いんえい 「印影」印ヲ押シタル形

いんえん （名）「寅緣」（寅、緣、軟）ヒ 寄リスヴルヿ。デヅルヲキトムルヿ。

（淫）

蛇ニ蛇ト交リタリト夢ニ見テ「蛇死ニテ口ヨリ婬ヲ出シタル」

いんか 印可（印信也、可、許也）藝術ノ免許ニ同ジ、皆傳ノ條ヲ見ヨ

紺摩經、二、第五品、三「若船舫（裏）坐者、作所印可也」

いんいんと（副）殷々 雷ヲ於テ乘ルナド、重キ響ノ音ニ云フ語、ゴロゴロ、

雷ヲ殷々トニテ聞ユ

いんきょ 允許 善文（ナンヒト許スヿ、許可。

いんく 印矩（印ヲ押スニ用ヰル定規、木ニテ小キ曲尺ノ如クニ作リ、其内ニ當テ用ヰル

印影、曲カヲタタシ、又、印肉ヲツケカヘテ二度押シタル多ク用ヰル

インクライン（英語 Inclined）勾配ノ強キ地、軌道ヲ設ケ水力又電

氣ナドニテ船ヲ昇降セシムル

いんぞう 陰火 オニビ、イルレイビ、キツネビ、

裝置。

いんけん 隱劍 あんけんノ條ヲ見ヨ

いんげんはう 隱現砲 大砲、砲架ヲ造船ノ時、高ク上ゲ、後ニ低クル装置ヲナシ、砲基ニシガミテ隱現砲基トシテ

いんげんはうだい 隱現砲基 前條ヲ見ヨ

いんさうカタル 咽喉加答兒 病名、感冒ニ伴ヒテ發ス、咽喉ノ粘膜腫

テ裂ニシ、痛ミ重キ、膿ヲモ出ス、痰疾出テ、聲嗄ル

いんし 隱士 隱遁シタル人。隱者

いんしゃ 薩 佐 あんしゃ ヲ見ヨ

いんじ 印璽（璽ハ玉ヲ云フ印ニ

いんにく 印肉 印肉ニ同じ

いんにく 引首印 閉防ニ同じ

いんすい 淫水 精液。

いんすい 飲水 ノミミヅ、

いんすい 引水 田ノ用水ヲ引キ通ズル

いんせい 淫聲 ミダリカハシキ音曲

いんしゃい 印紙 證書印紙(收入印紙)ノ代價 政府ニ收入セラルベキ金ヲ云フ。印稅。

いんぜい 印稅 印紙稅ノ略、之ニ按印料。

いんせき 姻戚 婚姻ヲ結ビタル者、姻族

いんせき 隂石 陰陽石ヲ見ヨ

いんにく 印肉 印肉ヲ貯ヘ置ク器、ニクイレ、肉池、印色池

いんのこ 犬子 (いぬのこノ音便) 小兒ノ也ムビル名時撫デ、唱フル呪詞

犬ハシのけヲ退クトテ小兒ノ額ニ犬トカフ字ヲ書ツユトアリ (いぬ(犬)ノ條ノ(三)参ニ犬箱(條ヲ見ヨ) 油糟(寶永)「額ノ三ツス寄リアフヲ見ヨ」百科ノ蓄ラセト祝フ いんのこ 屠殺工 隨筆(安永)「小兒ノ額ニ紅ヲツケルヲ犬ノコトニシ兒ノ泣クヲ犬ノコトテスカスモ犬張子ニ起ル」

イントロダクション (英語) Intro duction (二)ヒキアハセ、紹介 目錄

(三)ハシヂキ。緒言

いんばん 印板 版木ニ同じ、黒谷上人語燈錄元亨元年版、氣生ヲ

往生ノ正路ニ語カシムガ為ニ此和語ノ印板ヲヒラク」(松屋筆記一)

いんび 陰微 カクレテカスカナル。ホノカナル。

いんび 淫靡 タハレメルテ、ミダリナマヨキ、

インーツウ 銀ぎん 鼎 音

いんぼう 陰謀 カクレテハカル。密謀ニ多クラム。

陰謀

いんぐん・いんじゅ 允文允武 文ニ文武ニ文ニ文ノ徳ニ秀デサセタマフ、天子ノ徳ヲ賛ル語。

インーモ 副 (副体) 侠腐 (侠腐) 侠腐ノ世ノ俗語。カタゴト。

太平洞、長崎高資最後「如何是レ男子、侠腐年」

盛衰記三十 木曾追討「物ノ用ニ立ツベキ兵アリトモ貴エズ ニ向ノ輩ノ印地 冠者原ニ合戦ノ様ヲ学ブ」可習

盛衰記廿二、後宮合戦「若者共ノ軍ノ様ヲソヨセンケレニ、京童部ノ合戦 河原印地様ナリ。」

後愚昧記、建安二年四月廿日「雑人等及暴論出来 大路合戦、俗是ヲ印地ト稱ス」

「人ノ印地ト招喧嘩」 堀川百首 在原

在者若中前右近衛尉

武蔵ノ国、印地ニ勇ノ者ヲ集メ、佐々木ノ三郎、佐々木ノ四郎ト、

佐ガ勢百騎、白河ノ関ニ五十人カタラヒ寄テ」 野武士

(京ノ業内者トシテ五々堀川ニ押寄セタリ)

(三)後ニ五月五日端午ノ日ト定メテ童部、数多、河原ナドニ集リ

いんーび 隠微 カクレテカスカナル。ホノカナル。

いんぎ 淫靡 タハレ乱レ、ミダリカマシキ、

インーツウ 銀ヲ以テ通ジ

いんぎょう 隠謀 カクレテハカル、密謀ニ多シ。

陰謀

いんーぐん いんーぶ 允文允武 允ニ文ニ武ノ徳ニ秀テサセタマフ、天子ノ徳ヲ賛

碧巖集ニ曰ク「蓋天蓋地、撲落不著、恁麼也得、不恁麼也得」

同ジ五則「昨日恁麼、事不獲已、今日又恁麼、邪過彌天

ゆれども則「往年、是恁麼人、音信恁麼」

十ドヨテ天ニ上ル 表むしゃ製

△盛衰記三十 四木曽追討「物ノ用ニ立ツベキ兵アリトモ貴ケズ之ニ向ヒ、印地冠者原之ニ合戦様ヲ学ン」可習

ルイ・ナポレオン 宣言 シテ カウアリサンテリ

いんーち 引致 引キ寄セテ、引キ寄セテ、車レユヘ

いんぢ 印地 石打 石礫 石投 石投ト書キ 加多言 塵芥 二「いんぢ」ハ石ウチナベシ」

明徳上人伝下「或ハ石ヲ投ゲテ石打ヲ撰ニタマヒケリ」

いんぢ打ト云フハ、車言ヨリ博打打 如ニ

実数十年ニ到ル

(二)飛礫ヲ打合ヒテ戦ヒ合戦

向礫 ムカヒツブテ

盛衰記 廿二、夜笠合戦「若者共ノ軍ノ様ヲソヤセレケレバ、京童部ノ向礫ニ

河原印地様ヲ」

後愚昧記、建安二年四月廿日「雑人等及騒動出来、俗是ヲ印地ト稱ス」

後愚昧記 大路合戦

往年ノ印地、招喧嘩

堀川百首 往年

武士ノ輩、印地ニ出ル者ハ、義経ノ敵ニ成ル者ハ、義経ノ敵ニ成ル者ハ、義経ノ敵ニ成ル者ハ、義経ノ敵ニ成ル者ハ、

佐ガ勢百騎、白河ノ印地五十人カラヒテ」

京ノ業内者トシテ五々堀川ニ押寄セタリ

(三)後ニ五月五日端午ノ日ト定メラレ童部、出多、河原ナドニ集リ

いんぎ・うち 印地打 印地（インチ）打ハ印地（インチ）ニテ戰ヒ、端午ノ遊戯ナリ。兵事ノ演習ニ似タリ

雨窓閑話（信長秀吉時ノ雜話）「五月五日ノ日、休ノ事ナレバ印地打ヲ企トナス」堀川百首狂歌集（慶長元和頃）「いんぎうち 碑に中ル刀タマヨリ ダラリトタレリト血ヲあやめ草」加茂言（慶安）ニ「印地ヲ云ベキヲいんぎうち」武陸安民記、二十「河原陣」

いんぎ・うち 印地打 印地（インチ）ノ傳ヲ見ヨ

いんちん 菌茵陳蒿 ヨモギ。

インテン 印傳 いんぎんなる事

いんちん 印地（インチ）音便 其條ヲ見ヨ カモ言（慶安）ニ「印地ヲ云ベキヲいんちんヲ云」武陸

いんぶん 陰文 ぎうぶん（陽文）ノ條ヲ見ヨ

いんせき 陰陽石 女陰部ノ形ヲ彫ル石ヲ陰石ト云ヒ男ノ陰部ナル陽石ト云フ 迷信ニ用ヒ二石ヲ併セテ祀リナドス。

いんよう 飲用 水ヲ飲ムニモチヰルコト。

いんよく 淫慾

いんれい 引例 引用ノ例

いんろう 陰痿 ジンキヨ。男子ノ陰部ノ衰弱ヒン。

いんのふし 陰節 （茶香盤ノ香ノ雷文ノ長キヲ陽ト云ヒ短キヲ陰ト云フ）其陰ノ一節（ヒトフシ）延ブル意ト云フ 或ハ墨ノ蘭目ノ節ナリト云ヒイカン

冬至ノ日以後日々少シツヽ日脚ノ延ビユクヲ云フ 陰ノ目一節ヅヽ延ブ（ヒトフシ）

いちい（数）一二（いちにち）ノ便

いめ　射目（射部ノ略）狩、特島獣ノ射手ノ部、射目人トモ云フ

万葉ノ三十七「射目立テ、鳥見ノ岡辺ノ」同十三ノ十六「高山ノ峯ノタヨリ

ニ射目立テ、猪鹿待ツ如ク」同十三ノ射目人ノ伏見カ岡ニ」

猪鹿問れた比、猟保郡「立射目人於鮫窟射目前」

為狩」

いめびと　射目人　射目ヲ見ヨ

いめあはせ　夢合　夢ノ吉凶ノ古言

いめい　遺命　死後ニ遺サル命令。

いめい　異名　みやう（異名）ニ同じ

森むらや製

いもがさ　疱瘡（いもがさ、皇ノ異）　疱瘡ノ癒エテ残レル痕アルモノ

黒ヒテイモ、ジヤンカ、ジヤンコ、アバタヅラ、ミツケヤ、若屋伝「世間ノ」

いもと　妹　いもうとヲ見ヨ　麻面疱瘡　疱ヲ一人シテアツタリ」

いもし　芋石　蛤ノ殼ノ化石、形芋子ノ如シ

いもうとむこ　妹婿　我ガ妹ノ夫、

いもかど　妹門　催馬乗ノ曲名、催馬乗、妹之門、ノノノノヤ夫ガ

門、行キ過ギカネテ、我ガ行カバ、財笠ノ雨ヌヤ降ラナム、シテタヲサ（時島）

雨宿リ竹立ち宿リ宿リヤマカラム、シテタヲサ」

いもかはいとん　芋い餡餅　東海道　参河　名物、芋川名物ト元平餡餅、

一代男（天和）二、三州二川ヲ芋川ト云フ里ニ所ノ名物ヒラ餅」

いもがら　芋蕷（柄）二里芋ノ茎（イモシ）。俗名芋ナセノセ「芋、以閑都以毛」蔵、
以毛加良、一云以毛之、俗用芋柄二字「内膳式」芋茎（イモシ）二把　芋茎
（三）今ハ芋ノ茎ヲ乾シ名ヲいもがラト云フ、土ナルヲ乾るきト云フ　芋茎
いもがり　男ニ「妹詐」（詐ノ俗字）
妹ノ詐。女ノ居ル所。万ナロノ三十「心ノミ伊毋我理遣リテ吾ハ此ヌ
ミニテ」拾遺。○冬「思ヒカネ、いもがり行ケバ冬ノ夜ノ川瀬ニ千鳥
鳴クナリ」
いもせ　「妹子」（子ハ意ナクツル説、妹子、男ノ子ノ如シ）
妹ト立フニ同ジ多クハ妻ヲ立フ、万二十ノ三十五「吾ガ伊毋吉ガ偲ビニセヨトツ
ケシ紐、解ニナルトモ吾ハ解セジトキ」母姉子

森むらや製

典鏹（チンジュウ）ニ云フ「いもじノツカヒト云フ」

いもざし　「芋刺」芋ノヨウ連ネテ竹ノ串ニ刺ス事ガ如ク棒ニテ敲ヲ刺
シ貫クコト。
いもし　「芋茎」いもがラニ同ジ其條ヲ見ヨ
いもじ　「鋳物師」（いもあしノ異、作物所ヲつくもどころ）
いもカシニ同ジ。○立徳　吐上「いもじノ所ニ男ドモ集リ踊鞨（タヅ）ヲミ物ノコガタ
鋳ナドス」著聞集十六ノ三十二「コレノ御かまヲ見レバ云々カク候アモハいもじ
ニテ候フゾ、アサラヌハイカニ」
いもじ　湯文字（ユモジ）ノ略、ユマキ、イマキ、
いもしらとり　「妹姑」さしらとりノ條ヲ見ヨ
いもち　「稲熱」稲病、茎葉黄褐色トナリ白色トナリテ枯ル、一種ノ菌ノ寄生ニ
因ルモノ

いもと 妹 [illegible] 鏡 サタ「妹、伊毛止」

いもこ 妹子 妹名根 ねの 俤ノ見ル

いもひ 齋（ヲ） 齋 イモ コト。モノイミ。齋戒

[illegible] 「晴蛉」中「今日ハ十五日ノ名ヒナドシテ

アリ」（十五日ハ六齋日ノ一ナリ）空徳たゝえ「只ハ名ヒ特ニ[illegible]タマヒテ、忠ゝ[illegible]

相見 ムトノミ行ヒタマフ」名義抄、上部「齋、イモヒ、モノイミ」

いもの やま 芋山 ぞはま 俤ノ見ル

いもめ ぢ 芋明月 陰暦八月十五夜ノ月ノ異名 此月見ハ貴賤

共ニ芋ノ煮ノ芋ノ湯煮ヲシテ十五箇 三方ニ載セテ月ニ供フ又

九月ノ十三夜ハ九ノ三 栗又ハ大豆ヲ供フ因テ栗明月ト豆明月トモ云ル

女房私記（宣旨時代）「十五夜名月ノ御祝ニ芋茄ニテ云ヒ秋ノ節ニテ宮ノ

アケテ完ヨリ御覧セニル」（枕草子漫筆六）宇長日記、寛保四年「八月十

五夜九月十三夜ハ、都鄙イヅクモ月ニ愛デアヅビ芋豆ヲ手向トシテ云ヒ

月見ト云フ」日次紀事（延享）八月十五日「今夜地下良賤亦賞明月」

名煮芋而食之故俗称芋明月

いやーおお 否應（イヤ） 諾（ガ）ト諾ト、承知不承知「いやおお言ハセズ」いやおおナシニ」

（イナ、ウ、イナ、ア）

諾否

いやしき（副） 猥 イヨ（ヒキリニ）ヲ四五十九「春ノ雨ハ弥及降ルニ」四十九ノ三十三

「鳴ヲ聞ハ弥及鳴ケト」四十八ノ廿七「難キニキ伊夜之伎増ニキ」

いやしんぼう 駄坊（駄キ坊ノ意） 便、（とちめぼうとちんぼう、ぼう、ぼうん

ぼう）駄しきヲ擬人シタル語、いぢきたなし（同意）食物ヲ貪リ欲スルヲ再ヒメテ云フ後、

クヒシンボウ、イヂキタナ

長崎ニテいやしばう、佐賀ニテいやしさ、安房ニテやしばう、饗餐

やいつさ、トモ云ヒ

いやーつ、さ、医師 弥齋子ノ約ナルベシト云フ 齋キカシヅキ付(奉ル者)医ヲやつさ、

ト云フ。此説ノ真ナリト云フ 神功摂政元年紀、三月「貴人ハ貴人共、野伊

徒姑ハ共(夜)伊徒姑共」(三通)デテ倍臣ノ事ニモ云フ 鎌倉明治十三年

十月「百済王医明謹遣『倍臣怒唎斯致契』奉傳帝國云ニ」

いやーとしの(閏)年(ハヤトシノハヅレ)年毎ニ、毎年

万一ノ巻「去年見テシ秋ノ月夜ハ照ラセレド雷ト見シ妹ハ彌年盛ル」

四十九ノ巻「新しき年の初の彌年に雪踏みならし常かくにもが」(万十七ノ巻)

伊夜彦之触説ニ思フトテ、カクニ拒ガム今モ見ルコト」

いやーとほーながし(形)弥遠長 イヨク遠ク長シ、万十四ノ巻「富士根ノ伊夜

等保奈我仮山路ヲモ」(万三ノ巻「彌遠長親ノ名モ継ギユクモノト」)

四十八ノ巻「カクシ住(マツテメ伊夜等保奈我ニ」

いやーとーよ(副)(感)(風) 万一「ふよノ里ナル人」人ノ言ヲ折清スニ云フ感歎詞、

イヤ、イヤ、イヤ、エ、謡曲、八島、義経ヲ拾フ、兼房其軽

琴ヲ弾ム「判官コレヲキコシメシ、いやとよ君ヲ惜ムニアラズ云ニ、義経ナリト云ハレバ 魚今

ジ木ナリ云ハ」

いやーはや 感 いやトハヤトヲ重ネテ 呆レタル三度ル形

いやまし 形三 万一「八荒ましし、かしましかましなどの語ナリ」 否ニ思フ、嫌ハレ、

唐物語「名石いやすく心憂キ事ニゾオボシケル」

いやみ（呟）（嫌味）イヤムコト、嫌ヒ、ハシキ態度。「やみきる」ノやみ多クノリ」

いやむ　他四　「否」（「若尚いやむ」）おなじ、あやじ（同）あるにく、あやにく

（生憎）「辞ミ嫌フ。一厭フ。宇治拾遺、三「國司キ國司ニコソヨ、我等ニ

會ヒテカウハ云フゾトテいやみ思ヒテ」（國司ムツカリ、

いやもて　「嫌持」嫌ナガラ持テルト、心ノ嫌ヘドモ表ニ好クアヘシテ。

いやはる　自四（言ハレヤラノ約轉、更ニ異シテいやる

いやる　自四

いやをちる　「弥後」（弥（後）ノ倍ヲ見ヨ）（初ニカリニ幾度モ。

万二十ノ四十五「我ガ宿ニ咲ケル撫子　賜ハセム　エメ花散ルナ、伊也乎知爾

咲ケ」

（知ラレト知ラ）

「所射」

いゆ（動）「射ラルノ略、射ラノ受身ヨリ」（「射ラレ清」）

射ラ　「射ラ」ニ同ジ　齊明紀「青イ伊喩能ナグ河辺ノ若草ノ（序）

若クアリキト我ガ思ハナクニ」万十六ノ廿七「所射鹿ヲツナグ河辺ノ若

草ノ」（天武紀上、元年七月、壬申ノ戦、「大分君稚臣ニ被矢入陣衆

走乱而散走」　共ニ紐正形ヲ連体形ニ用ヰル　万十四ノ廿四「於布之毛等（生ノ藤）

ロ十六ノ廿六「射ル河泉水津ノ例ヨリ」

いゆし、いの（祝）「所射鹿」（「射ラルノ鹿ノ義ニシテ痛む死ぬ」（いゆ（所射）ノ倍ヲ見ヨ）

カル」　痛む、死ぬト云フ語ノ枕詞、

万九ノ三十四「所射十六ノ心ヲ痛ミ」ロ十三ノ三十四「所射ノ完ノ行キモ

死ナムト思ヘドモ」

私記「射ノ之鹿ヲ」

神武紀代ヲ

年十二月「昔ニ々五瀬命ノ中矢而薨」

若風俗ハいよう、ようチ之助サマ萬人ノ中ニマタトゴサ〻ロイ」（若葉歌舞妓ヨリ）

いよいよ（盛）〈一好（イッチヨウ）（ソウチ（最）ノ倍ヲ見ヨ）ヲ約メテ ちよい、ちよいト云フ

傾聲（ホンコエ）アリ、（其倍ヲ見ヨ）ソウチよい、〈ちよいト轉ズル〉（いよいよ）

唄三味線、踊ナドノ妙ヲ傾ムルニ投スル聲・轉ジテ、ようよう、ソヤソヤ、

やんややん。或ハちよく、やちやく、唱来

心ニ任ス自適ノ一「ようようやちやト褒メタマヘバ」

櫻陰比圭（元祿）誣ノ拍子ヨソヤ、やト褒ムルコトアリ

狂言ニ、どふか（ちり「やん爲ぜんや、サテモサテモ」

いやつく 自四 甚就（ヂンシツク）（ヂンセツク）、うろつく 同 徘徊

甚トク宗書（オム）

甚ハ（アイカワリ）

大和（甚刻ノ秋）

いらーあし 形 「最甚（イヤナ）（苛甚）」ノ義、あらけなし、いとけなし（なし）

ヤケル、ヤケル（コトゴトシ、ヤケル、エラヒドシ、空穂、豆原君サニ「天下ノいらなき（軍士）

キハタテテ甚シ、ヤケル、ヤケル、ヤケル）

ヤケル、ヤケル

ヤケル、ヤケル

ヤケル、ヤケル

いらる　自下ニ「焦」（焦コノ焦ラトナルガ一説トナルナリ）昔偲ばる、無思はる
ト同類ナリ」思ヒヲコガス。イライラシク思フ、ジレル、
空穂、菊宴、イミジク感ヒいられタマフメルヲ」源、胡蝶…「花ガマシキ（ワビコト）儀言
ドモヲ集メタル御文」心ハ花ト云フ語モ是レナリ
いられ（東）焦ラヲ見キ（サ落達一ノ下「泣キいられバツカフ人モヤスカラズ」
いらら（名）「刺々ノ約」棘ノ條ノ項
いららぐさ「草名」「羊桃」卑湿ノ地ニ生ジ高サ二尺、葉ハ桃ニ似テ花白キモノト云フ
本草和名上ノ四十四「羊桃、以良々久佐」倭名抄二十ノ七草類「羊桃伊
良々久佐、以桃花而白」

凌むつや製

いらく　他下ニ「貸」「借」ル。代貸スノ及
「貸」「貸」。天武他下、朱鳥元年七月「天下百姓由ニ
多ク而貸稲及負財ニ」天武紀下錄十ノ十八「貸、借耳」家人、伊良
不」今ヲ辯図牲ニテハ借ラヲいらくト云ヒ安房ニテ借リて来よ、いらってさい
上云フ
いらす　他四「貸」「貸ス。借ル」ノ及。「出挙稲」
天武他下、四月、諸國貸稅「明察百姓五々中戸以下意奬貸」
天武紀下錄十ノ十八「貸、借奬」家人、伊良須」霊異記中ノ第三十二「作
酒息利」訓釋「息ノ事ヲ利ト云ハ」

いらし（名）【貸】貸スコト、貸シツケル

官ヨリ人民ニ貸シ下ル稲ヲ貸稲、貸稲ト云ヒ、春ニ貸サレテ秋ニ稲ニテ利息ヲ納メシメラルヽヨリコレヲ出挙稲トモ又扶置家「出挙イラシ」

孝徳紀大化三年二月「宜ク諸ニ吉備島皇祖母ニ貸稲」天武紀下、四年四月「諸国貸稲ニ中戸以下進換貸」「袖中抄」十三「田作ル者ハ春時米ヲ人ニ取テいらしテ夏ニナリ田ヲ植ヱヤツテスルヲ田ツクト云ヘリ」

いらつしやる　自四【被為入】（入ラセラル）約マリテ四段活用ニ轉ジタルモノ　あつかる（敬）

ハ語尊ヲ見ヨ（一）入り来る（行キヤス、イキヤル、来タヤス、キヤル）敬語。（二）同じ活用ニテ居らせらる約マレル活ニテ居ル敬語ナル

アリ、居タマフ。居マス、サヤル。

森むつや製

いり【要】（イリメ、カリ、入用費用　所須）

いりあひ【入合】山林ノ枯木取ル草刈ル海上ノ漁猟ナド数村ノ人民

民互ニ立入リテ取ルコヲ得ルト、

いりあや【入綾】（舞ノ手ヲあやまりニ壁ヘテ云フ活ヲト云フ）

舞楽終リテ入ラムトシテ又取ヲカヘシテ舞ヒテ入ルコト、云フ

源、紅葉賀、五「舞手ノ所ニテ後ナキチヲ書ニクル入あやノホドゾロ寒ク（ゾッ

トスルホド面白ク此世ノ事トモオボエズ」河海抄「舞有取綾ノ手ノ故ニ入

綾」花鳥余情「更ニ取ラカヘシテ面白ク舞フコトナリ」源若菜上ノ六

十五「舞ニ情ノ智落蹲ノ舞ニ舞ヒ果ツルホドニ樽中納言ノ持リ

給ヒ陪リテいりあやヲヤハカニ舞ヒテ紅葉ノ蔭ニ入リヌル名殘、飽カズ興アリ」

いりは 入側 家ノ内ノ様側ノ意カ 大家ノ内ノ座敷ト様側トノ間ニ
細長ク人ノ歩ム道ト云フ所、幅六尺乃至九尺、畳敷ヨリ寝殿造ノ
簀子ニ類シタルモノ。イルカハ。エンガワ。

いり・あられ 炒霰 雑煮ニ供スル菓子 餅ニ砂糖ヲマゼ 色ヨシ 青赤白ノ三色
ヲ搗キアゲタルモノ 暮日ニ切リテ 切リタルモノ

いり・かや 炒榧 榧ノ子ヲ炒リタルモノ 菓子トス 諸国咄(貞享)硯箱 蓋ニ
云ヒ清所 食榧 サマザマノ菓子 積ミテ

いり・ガラ 炒鍋 ヲ見ヨ

いりがら 炒殼 炒鍋ヲ見ヨ

いりきり 入寄留 寄留ノ條ヲ見ヨ

いりこみ 入隠 まみまぐかくヲ見ヨ

いりさく 入作 他村ノ民ノ或村ニ田地ヲ持チ 来 ソコニ入リテ 耕作スル

入作人 村ノ外ノ他村ノ人 其民ヨリスレバ 出作 デサク ニシテ 入作ナル

いりざさく 入小作 いりさくヲ見ヨ 時ニ入小作 出小作トモ云フ

いりに 入荷 産出地ナドヨリ送リ来レル品々。 ハ多

いりたち 入立 入リ立ツテ。親シク出入スル 秋菓子ニ十「オハヤケ所」ソリタチ
又男女ノ子ナド」(三)簾中入ニシノ男

いり・みだれ 自ラ三 入乱 入リ合ヒ 乱闘 モミアヒタヽカフ 「多勢ノ乱闘」 いりみだれ

いり・に 炒煮 油ニテ炒ンテ エキヤキ 油煎

△うぶかの蔭
音スル語ナリ

いりほが　名「鑿」（入穿）いりおげ、いりおがトナレルガ假名書ニ違ニ記セル
（違ベシ）
（神武紀ニ「穿邑此云于介知務羅」トアルハ古音記ニ「福穿地」トアル地ナリ又うはぎ、おはぎ（薯蕷）ニうむかし、おむかし
（音ガ）ナドニうぶ、相通ゼリ）

（二）和歌ヲ作ルニ、意匠ノ餘リニ深ク入リ過グルヿ。八雲抄ノ「言葉ノいりほがトハ歌ノアリアケ、月ノタグヒ、露アケテ、雲タケテナドニテ風情ヲ」定家卿消息（毎月抄）「宜シキ歌ト申候ハ、歌ノ心ノ深キノミゾ申タメル、アリニ又深ク心ヲ入レムトテネヂスグセバいりほがノ入リクリ歌トテ云ヒ心ナキヨリハウルテク見苦シキ事ニテ侍ル」

（三）考證理論ノ穿鑿ニ過キテ覺道ニ入ル。ウガチスギテ穿リ損ズル。

△増鏡、下月草花ノ日前ニ死ヲ予ル者数ヨニテ一日一夜いりもみドヨミ明カスニ」

いりもむ　自四「揉」烈ニク揉ミ操ミ操ミ源氏ノ「紅日ニいりもみル屋ノサワギニ」宇治拾遺「土ノ觀音ノ恨ニマシテテ五ニいりもみマヨミテ情前ニシツブシ」

いりもむ　他四「揉」烈ニク奉ヲ焦ル。

いりもや　「入母屋」四阿屋ノ棟ノ下左右ノ切妻ニ入ルモノ。

いりやまがた「入山形」模様ノ名。山形ヲ横ニ並ベテ切チチガヘタルモノ。

いりわう「入王」将棋ニノ我ガ王将ノ進ミテ敵地ニ入ルモノ。将棋盤、俗ヲ見ヨ

いりやまぢ　「不入斗」（斗ハ計ノ字ノ草書。入リ数ヲ計ルトイフ）

（「よいや（彌）」朱村ノ「精ニ餘戸ノ遠ナル」ニテ貢稅ナキ神田ナリ所謂寺領不入ノ地ナリトイフ武藏國荏原郡ニ入不斗村（今、新井村ト

伊勢ニ眞入（新井村）地ニ鎮ル神社アリ 隣村大井村鹿島神社 鍛口ノ鍛ニ入不

須村トアリ 遠江国山名郡上伝国市原郡ニ不斗村アリ共ニ古神社アリ

節用集大全（延享）以前ニ姓氏ニ「イリヤマ」「入不読」

うりよね 「賣米」

うりよね 「入米」（かひよね（買米））ノ條ヲ見ヨ

いりわけ 「入譯」 入リクミタル仕組。 菅根崎心中（ ）「内方ノ入譯ヲ咲テ

聞テ居マスレド」

いらぬ 連体 「不入」（要ラヌ、打消ヒ）「田井ヤキ不田ニ無益ナル徒為

鷹狩ノ草（寛永）「延喜式ノ人ノいらざる（富士参）いらぬ差出ロ」

いらば 「入側」 いらば（入側）ヲ見ヨ

（和歌ニ言語ノ通セヌコトヲ云フ）

イルマ・たゞば 「入間詞」 「いるまの條ヲ見ヨ」

陸奥島人ノ言語ニ云フ うるまの島人ト云フ 奥

深キヲ浅キト云ヒ 老ヒヲ若シレドス（デ反）対ヲ云フ逆詞ノ意ノ語

續狂言記、五、「入間川（武蔵）」ニ或ル大名ノ土地ノ者ニ深キ

所ヲ浅シト言ハセテ深浅ニ陥ルモノヲ演ズ 和歌ニ言語ノ通セヌコトヲ云フ

（此狂言寛正五年乱河原勧進能ニ見ユ）

週國雜記（文明）「立宮リラ影ヨウツセバ入間川我ガ年波モサカサマニ行ケ」

経ジテ申シ通ジ云言葉ナドモカヘサマナル事トモヒ 異形ナル風情ニテ公リ」

（狂言ニ因テ設ケテ云ルナルベシ） 入間詞ノ意ニテ入間様ト云ヒ

（陸奥ニテ作リ出ダル詞トオボユ）

テ意少ク要ゼリ。片言（慶安）ノ山崎宝鑑ノ「カンマシヤ此里過ギヨホト
トギス　都ノウツケサヨリ待ツラメ」ト詠ミシヲ聞キ（イト）醒メテ惜キヤウナレド是レハ
まやフトテ狂歌狂句ノ本体トコロ承ハル」　墓磬集（萬治）「若ヤグヤ入
間言葉カ今朝「春」　続山の井（寛文）「あしト云フ名ヤありのみノ入間
やう」
ヲイルヤーやう　入間様　ゴまやうノ俳ヲ見ま
れあはす（三）　入合　うめもけすノ同じ
れ・ケ・ち（意）　入代　ちかせ　同じ
れ・かふ・ルフレヘ　他下ニ　入替（別物）　替ヘテ入ル、トリカフル。
れ・り・カヘ（忌）　入替　イレカフルヘトリカヘ。

森むらや製

れさ・ま　入五

れさ・ぐび　入子首　戦場ニテ捨首ヲ拾ヒ堀ヲ着セテ将士ノ首ニ稱スルモノ
（夏山雑談、三）
れさ・りん　入籤　籤ニ作ルキノ、子母印
れさ・まら　入子枕　箱枕ヲ三ツ五ツ入子ニ作リタルモノ、ムサウマクラ　重枕
れ・ちが・ふ　入違フ　他下ニ　入違　日ヲ過ケテ入ル、入レソコナフ。
れ・は　入端　煎茶ノニガ。テバナ。

雄略紀ノ「吾妹稚媛」ヲ若妹美古之俗字

いも（名）妹（三）男ヨリ妻ヲ始トシテスベテノ女ヲ親シミ呼ブ語。仁賢紀十九

「古者不言兄弟長幼、男ハ以女稱妹」ト云フ一ノハ「家ナル妹ヲ懸ケテ偲ビツ」（妻）同十二ノ九「妹ト云ヘバ無礼ノ聖ナリシカスガニ懸ケマク欲シキ言ニアルカモ」（他ノ婦人）

古事記上ノ四十一「伊毛ノ命」（ハチヲヤ）

（三）又女ドモヲ間ニ呼ブ言アリ

神ノ嬬后後藤理氏貴命ヲ呼ビタマヒシヤリ」

万葉十九ニ大伴家持ノ妻女郎ノ歌

特ニ妻（愛シル歌ニ妹トアリ

（三）女郎。神代紀上ノ「五柱神妹大屋津姫命」古事記上ノ四十二「阿遲鉏高日子根神次、妹高比賣命」

いろ（名）色（白粉ノ色ノ義、婦人ノ假粧色香ト云フ）是ヨリ（いろかノ條ヲ見ヨ）陸ヲ色ヲ好ム色ヲ愛ツ、色ニ迷フナド云ヒテ女ノ色ノ意トナル此語意平安朝生ジタ新オボエ」

（二）女ヲ愛ツル情。イロコノミ。好色ノ女色

伊勢ニ十一段「いろ好ムトテ出ましものト」源注釈四十九「此宮ノイトサヅシキマデいろニオハシマスナレバ」葉末根合三十六「マタキヨリいろニオハしマシテ、ヌビアリキ、イミジラセタマフ」

（三）男女ノ情ヲ通ハスト、情交「情」「情色事」色事」

（三）相恋ル人、恋人。情人六帖六「女郎花、色ニモアルカ松虫ヲトニ若シテ誰ヲ呼ブラム」散木集中「いろる人ノ親シキ人ヲヨ数ヘバ」

(四) 婦女。「色ヲ愛ル」

(五) 迷人ノ異名、心中丹水朝日中「一座ノ公、私ラモ行水シテ来ウト

皆、表ニ出テコケル」

階級ヲ表ス染色、

(三) 黄色。

各着ニ色色特徴

(三) 禁色。(其係ハ先ヲ)

(色)

(生)

(三) 白粉。

(四) 紅。

(五) 婦人流行。

破里紀七年八月「天人養人者莫若者」

婦ニ三銭花

蘭澤

瞞世窓

「侍」

いろ (名) 色 (一) 光ニ固有ナル一種ノ性ノモノ。光線ノ三角柱ニ透カレテ見レバ光線屈折シテ赤、橙、黄、青、緑、藍、紫トナル。物ノ體ヲシテ眼ニ各種ノ見ヲ生ゼシムルモノ。色ノ重ナルモノ、紫、紺、青、緑、黄、橙、赤、ソノ七色トイフ。又、古クヨリ、五色、又ハ正色ナドイフハ、青、黄、赤、白、黒ナリ、其他ノ紫、緑等ノ色ヲ間色トイフ。

うるはし (麗) ノうるノ轉ナベシ。うつくし (美) ノうくし

(厳美) ちしろし。いちしろし (著)

△△「万三ノ世ノ姿ニ
近クトモ色ニ出メ
ヤモ」（思ヒ顔色
ニアラハル）

（裏カ）
葉花映待見
「いろノ初色」

（ナサケ）
（）アサヒカ
モムキ
「色ヲツケル
「色ヲ持タル
砂石集ゼノ下、
「人ノ心ハサシ

（カボヤ オモテ）
（七）（五）「顔色」裏ノ。△
「伊吾ニ北ナ」
「問ヲテ」「色衰ヘ」「色白シ」
（八）（六）「色」
（ハ）クハモキ。ウツリ・シキ
（ト）髪ノ毛ノ色ノ美シキ
見」葉花キ（ワビシ・ハ）「黒キ髪ノ（オンソ）衣ニ南髪ハ南衣ヨリハ（ミテ）いろ（ミテ）咲ケト」
（チ）キサシ（サマ）・容子「桜色」「夏色」「引色」
（リ）ヒヒキ・南子（動）「琴音」「色」「聲色」
（ル）シナ、タグヒ（ロ）（動）空穂、俊蔭「日ニ見エル鳥獣、いろ〻ニズ殺
シテ良（ハ）「三色」七色」
新古今秋ノ・稲穂、都名、茱萸ニ・稲マノ色ノ物ヲ備（春）」

10 表むらや製

歌舞妓芝居ノ思形ノ綺麗ナ見人物ニイデタツエノ、情緒ナル寅要。
歌ノ。
いろ・こゝろし「色漆」種々ノ絵具ヲカ（ゑん）漆
いろ・かき「色書」（色ノ品ノ意）自録ナトニ一ケ（追上）ニテ其下ニ山鳥、亀、樺
ナドト書キツラネル。
いろ・だと「色恋」男女情ヲ通ハヲ、情事、痴情
いろ・ね「色音」花ノ色ト鳥ノ音 耳底記（鳥九蓑廣）「花鳥ノいろね」
いろ・まち「色町」イロゴト、遊所、好色徒然草「風俗シナシナド好キ女ハ極
テ三ケノ色所ニテカギニズエニ」（嬉遊笑覧、九）

いろはし「色直」白小袖ナルヲ色小袖ニ着替フルヲ婚姻ノ後三日目。

行ア東川素小僧式行ハ婚式ハ

或ハ九日目ニ行フモアリ畧儀ナルベシ又民間ニテハ婚姻ノ儀終リテ宴ニ

移ルトキニ行フ

宗五大双紙「人妻迄ヘ「初日ヨリ二日ヲデ男女共ニ白色ノ着ヲシ三日目

ニハ色直シトテ色アル物ヲ着ル」

談所花「百日ノ中ハ白袖、百一日目、色直シトテ雇婦、男

並仕女ヲ色小袖ヲ着ス」河内物語十三「市屋當日上下着白装束ニ九

夜改白装束ニ俵三斗常ノ如」

いろいさそで「色小袖」浅色ノ小袖、白小袖ニ對ス（ゆかたし俗ニ見キ）

いろか「色香」（二）白粉ノ色ト油綿ノ香ト。婦人ノ假粧。紅粉

雄略紀七年有「吉備上道臣田狭曰天下麗人莫若我婦」

諸好備美

鉛花井御、芋蘭澤無加曠世空倩ニ」鉛花ハ白粉ヨリ蘭澤ヲ

油澤ヨリ文選ノ注「鉛花、粉也、蘭澤以蘭浸油澤、以塗頭也」

（一）花ノ色ト其香ニ。古今、一番上「ヨソニノミ、アハレトソ見シ、梅ノ花アカヌ

香色

いろかハ折リテ折リケリ」

（三）穴色ノウツロヒキ（ホヤ）ノ艶ヲ艶容「色香ニ迷フ」

いろがたき「色敵」恋人ヲ偽リ多フ者ロ科ニハ注サヤアテ、

△「いろ」の熟カノ約（あさぎ、ちさ（麻））

△「甲」ノ異形

△「若ハノ若」ニしくづ（蓮茎）ノ意、小奥ノ意ニモ

いろは　「鱗」　△うろこノ古言、イログ。コケ、
生鏡七十「鱗、奥者上貫、伊呂巳」
倭名抄十九「五鱗、以呂久都、伊呂古」古事記上ノ六十六「如鯉所造之宮」空穂物語「いろは、御髪」

梅花笠「色ロノ堆ノ六ツノ如ク打チ重ネテ」

△「奥」うを ニ同ジ、イヲ、ウロクヅ

いろくづ　「魚」（二）（其條ヲ見ヨ）ロロ、ヲ

「奥、秋ノ今日ハ雪ヒカリ、河瀬ニ鮫ノ日モ」

（△「いろくづ」ノ約ヲ山家集）山家集「見ル人ノ涙ニ濡レ、いろくづ」

（○「水潜ヒ孔ヲ、潜リヲ命ミタム、いろくづ」）

芭蕉、伊賀紀行「宇治川、底深ク沈ム、いろくづ、ノ個ナラ、ネ、スクヒツルカナ」

（三）通ジテ「鱗」（其條ヲ見ヨ）

森むつや製

△神代紀下ノ「味耜高彦根神ノ妹、下照姫」

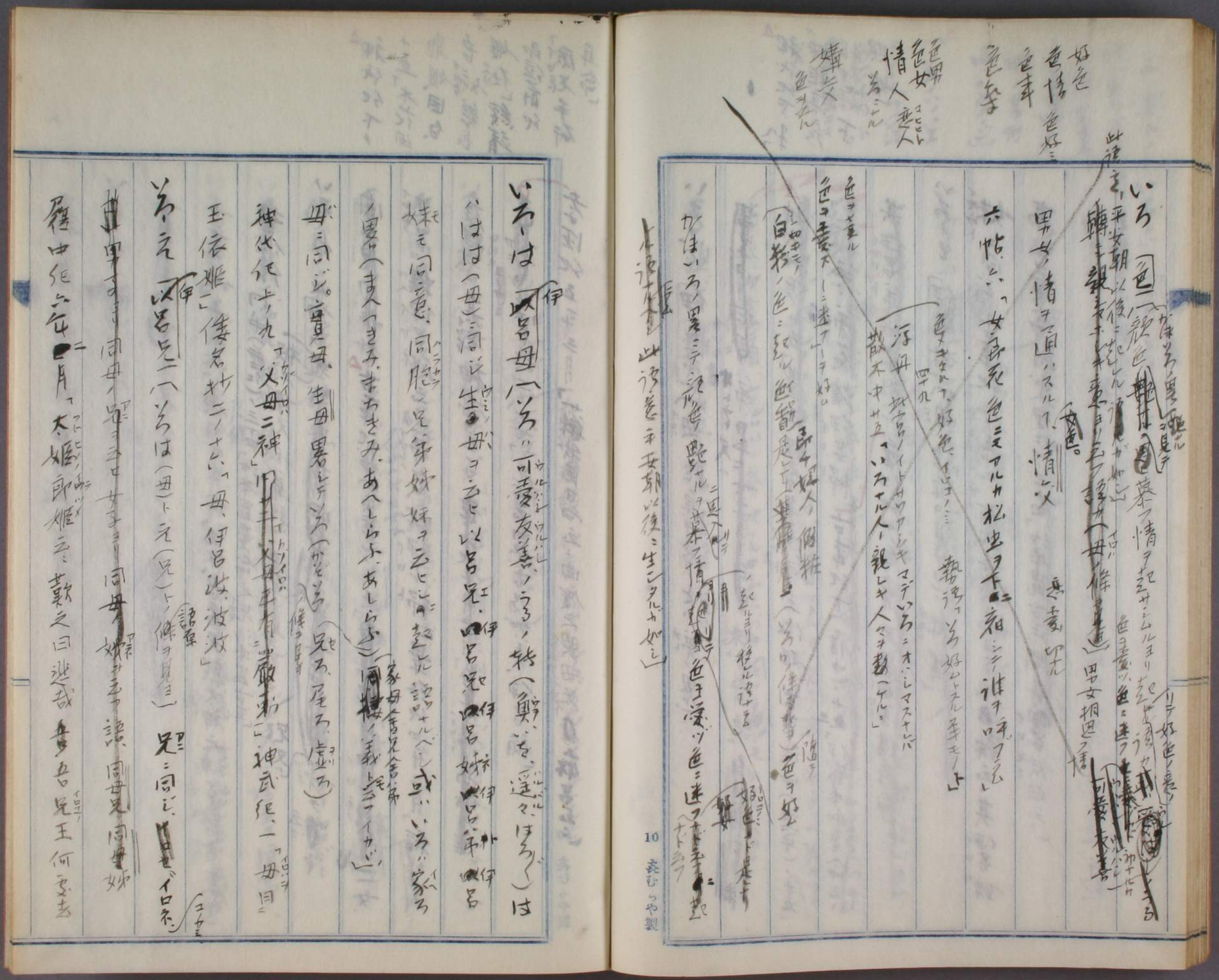
いろど　「伊呂弟」（母ノ語原ヲ見ヨ）とハ弟ノ異

「妹」ヲ云フ語。

△神代紀下ノ廿五「豊玉姫ニ名其女、弟玉依姫」古事記中（安寧）十五「二女ニ、弟名媛伊呂杼」古事記下（履中）十五「伊邪本和気命ニ、其伊呂弟水歯別命」垂仁紀廿六年「天皇母弟倭彦命」

いろも　「伊呂妹」（母ノ語原ヲ見ヨ）妹（異）

妹ニ同ジ、古事記上ノ五十二「阿治志貴高日子根神ニ、其伊呂妹高比売命」同中（垂仁）ノ三十四「沙本毘古王、問其伊呂妹曰ヒ」



いろ 【色】 顔色 艶 ガホ 男ノ見テ美シ 美 美人 美女 美男 美人 美女 美男 美人 美女 美男

耶」久米昂傳紀「弟我兄二天皇」

ソラ〜せ　伊呂兄（イロは（母）とせ（兄）ノ語原ヲ見ヨ）

古事記上ノ廿八「須佐之男命、五ヶ、吾者天照大神之伊呂勢者也」（弟）

伊仏　同中（重仁）ノ三十四「波本黒麦命之兄沙本黒古王」

根（母又根（弟））語原ヲ見ヨ　兄又

いろ〜ね　伊呂兄

古事記中（孝安）ノ十五「二女、兄名、蠅伊呂泥、次、弟名、蠅伊呂杼」景行紀四年二月「稲背入彦皇子、其兄神櫛皇子」

倭名抄、二ノ十七、兄、一云昆、古乃加美、伊呂禰

孝正紀五年三月「十餘我臣日向云、日僕之異母兄」

森昌五郎　森むらや製

神代紀下ノ十五「木花開耶姫、因白、吾一宿妊娠、姫在」綏靖即位前紀「腐兄手研耳命」

いろふ　他ニ「綺」（前條ノ詰ノ代重上リテ、いろどり、あやどりの意トナルカ）

（二）取扱フ。源、若山乗下、十七「惟光朝臣、例ノ思ブル道ハイツトナクいろひツカマツル人ナレバ遣ハシテ」（ツカマツル、カマフ）

（三）カカツラフ、カカリアフ。「日月ヲ天ニ、干海ノ名義ヲ、綺イロフ」（雜）

保元ノ新院御謀叛「天下ノ事ニ於テハ、いろはセタマフ事ナカリシカバ」

平家、二、先帝切「綺ふマシキ事ニ綺ヒ誤ラザル天皇座主ヲ流罪ニ中ニ行ト」（太平記、一、〇〇ノ「市治世ノ政事、朝議ニ任セ奉ル上、武家いろひ申スベキニアラズ」）

（三）手ニ觸ル、セアツブ（セセル）、イジクル（近義）再

狂言ニ、佛師「いろうテ見マシタレバ、ダダ人肌デゴザッタ

いろめがね 色眼鏡 薄青ナド、硝子ヲ玉トシタル眼鏡

いろもの 色物 寄席ニテ講談落語ヲ五ツ演ズ

いろをとこ 色男 (二)美男子 美貌ナ男 (三)恋人 情夫

いろーちゃん 色女 相恋ル女 情婦

いろんな 種々 (いろくさまの約語) 種々さま「いろんな物」

いわたる 自立 濃(い)い 薄い 濃る トモ同じ

ウナヰ 「珠洲(能登)ノ海人ノ沖津御神(元器ナリ)ニ伊和多利テ潜ヲ取ルト云フ真珠ニ」

いろ 色 「依遣」(い)

ヰチラッカズナル 是非ノ決定ナ

いーあーちゃうぎょう 「異位重行」 王卿以下、朝臣列立ル次第

語、昔ヨリ前ニシテ、其後ニ重ヲ立ツ

内裏式上、朝賀「親王以下五位以上、東西分頭立庭中」去弘仁天平、異位重行

代始抄、二位一列、三位二列、四位一列、コレヲ異位トスト三位等重ヲ立ツ

コレヲ重行トスル」建武年中行事「三位中納言、大納言ノ末ニオメル三位ニ

朝ニ中納言ノ末ニオメルセ」 異位重行

いを、ヰ 「筈」 矢ノ弓ニ当ル(箭)ノ條ヲ見ヨ

いを、とり 「夷捕」 アマビト、アマ、スナドリスル人、レフシ、漁夫

俗ニ抄ニ十四「漁子、伊乎止利」

いをーの、ふえ 「艇」 ふえノ條ヲ見ヨ

いろは、こた　以呂波歌　同じ文字ナキ歌トテ　假名四十七首ヲ七首五首八句ノ

今様歌ニ詠ミ入レタル、涅槃経ノ真言、諸ノ偈ニ意ヲ演ベタルモノトカ

良福寺本　積玉集序ニ　色者詞散畢、諸行無常也、我世誰嘗

常住、是生滅法也、有為奥山今日越、生滅已也浅夢見志不

酔、寂滅為楽也　此歌弘法大師ノ作ト傳フレド今様歌トカフモノハ和

讃ニ移リテ花山一條ノ院ヨリ始マリシモノナレバ時代合ハズ　同じ文字ナキ歌ノ

ありつゝノ歌、たゐにノ歌ノ次ニ出テキモ三ノ山歌ノ末ハ承暦三年拾遺光明

最勝王経音義ニ見エタリ　最モ古シト　オモフ　河海抄　梅ガ枝ノ條ニ江談

云天仁二年一月假名手本ヲ以テ弘法大師ノ所作云ヒナド証アリ

森むらや製

いろはうた　「以呂波歌」物ノ名ノ次第ニ其頭ニヲ以呂波歌ノ四十七音ノ次第ニ従テ立ツル、以呂波附、以呂波番号ナドトモ云フ

いろは、花ヤ　以呂波葉屋

いろふ　自四「艶」（色ヲ活用ス）艶ふ堪ふ歌ふ同趣

（二）色ヲ生ズ、艶ヒカル、名義抄「艶、イロフ、ウルハシ」

和泉式部集「雨ノミシタ、ル垣ノ花」

（三）色、映ル、淥若ヤ来下、十七「何葉ニ目ノミ移ヒいろふ」（目移ス意）

いろ-ふし　色節（物ノ色事ノ節ノ意ナラム）

際立チテキラビヤカナル物草ヲ、五月ヲ初メカシマシキモノ「清涼殿ノ及移ニ元結ノ村濃イトケヤヤカニ出デ居タル云々、上雑仕顔ドモイミジキ色ふし上色ヒタルイトユトワリナリ」徒然草百九十段「夜ニ入リテ物ノ映エトキ五人、イトクチヨシ、萬ノ物綺羅飾リ色ふしゝ夜ノミヲ見メデタケレ」

いわく　クルクル　自下二　「諧謔」（弱ノ驥ノ意）わヲ活用セシメシ語ナルベシ（よわし、いわし（鰯）玉篇「驥、諧謔也」）

諧謔キアワリ。雄異記（仁前紀）「抱屈駭怪不解所由」安閑紀元年四月「諧駭而顛」皇極紀二年十一月「古人大兄皇子喘息而来問」

いわく　クルクル　自下二　「稚築」（前條ノ語ト語原同ジカルベシ）

子メク、アドケナクテアリ　源氏、ゆゑ「マダいわけぬ（ば）雛」ナドノケハヒノ見エ

バ」　榮花、かゞやく藤壺「マダイト幼キカルベキニ、イサカいわけぬエトナケ、云ヒ、アサマシキマデ、おとるびサセタマヘリ」

のはわ
原本ヲ見テ
ソノトキリ ニスル

いわけなし　形一　稚氣（イワケナ）ハ稚氣甚シ義、前條ヲ見ヨ」
（子メキタリ、アドケナシ、ヲサナイトケナシ。

涙、痕（跡）ヨ「いわけなく（オ、シマシ、時ヨリ見居リ」廿落六注、十七）いはけなき、
モノカラヲカシケレバ」（少女ニ考）六帖、三「全フコトノカタヨセニた網自ニ、いわけ
なきまで恋ヒカ、リメル」

いわしあみ　鰯網　海中ヲ鰯ノ群ヲ囲ミテ捕ル用ル網

いわしぐも　鰯雲　ミヅガキ、白コゲ、ヒ、ロ、ヒ、ロ、ヒ、ロ